第 13 分科会 「総合学習・生活科」

共同研究者氏名（所属）	善元　幸夫（目白大学）
分科会役員氏名（学校名）	植木　裕大（山ノ内西小学校） 金井和也（清内路小学校）

11月４日（土）

時間割		レポート題名	学校（支部）	氏名
討議Ⅰ 13:00～ 15:00	討議の柱：実践レポートを元に、よりよい総合学習・生活科の在り方について考える（1）			
	1	課題提起		
	2	自ら願いを持ち、対象に繰り返しかかわりながら、探求し続ける子ども	上田市立東小学校 （上小）	佐藤利斗
	3	子どもが着目した「ソルガムの可能性」と活動の姿	松本市立安曇小学校 （松塩筑）	横山享司
	4	子どもたちの「伝えたい」を引き出す総合的な学習の時間における情報発信について ～SDGsの取りくみからみえてきたこと～	飯田市立松尾小学校 （下伊那）	北條彩香
討議Ⅱ 15:10～ 17:00	討議の柱：実践レポートを元に、よりよい総合学習・生活科の在り方について考える（2） 日々の悩みやこれからの総合学習・生活科について語る			
	5	地域に学び、地域のよさを実感できる総合的な学習の在り方 ～学びを問い返しながら地域の「ひと・もの・こと」との関わりを深める子どもの姿を目指して～	宮田村立宮田小学校 （上伊那）	富本智子
	6	1人1人が願いをもって心ゆくまで追求するなかでお互いのよさや違いを認め合う子どもたち	駒ヶ根市立赤穂南小学校 （上伊那）	森田・安田
	7	日々の悩みやこれからの総合学習について		
討議Ⅲ 17:00～ 17:30		まとめ		

参加者への連絡事項	

上田市立東小学校　佐藤利斗

１３総合学習・生活科　分科会

上小支部
上田市立東小学校
佐藤利斗

自ら願いをもち、対象に繰り返しかかわりながら、探究し続ける子ども

全校研究テーマ
自分と違う考えにも耳を傾け、互いの立場や考えを大切にできる子どもたちを育てるために
～自分の考えを伝えられる子ども・友だちの考えを受け入れられる子ども～

テーマ具現化のために大切にしたいこと

人権教育とのつながり

① **「伝える」「聴く」機会づくり**
ペア・グループ活動の積極的な活用

「受け入れて聴く」ための視点を与える

② **相手の考えを大切にしながら「聴く」姿勢づくり**
友だちの考えの良さを見つけながら聴く

伝えやすい状況をつくり、「伝える」「聴く」の場を増やす

③ **子どもたちの考えを「見える化」する**
授業の流れが分かる、子どもの考えが位置づいた**板書づくり**
思考・表現ツールとしての**ＩＣＴ機器**の効果的な活用

板書やＩＣＴ機器を通して考えをつなげやすくする

総合的な学習の時間研究テーマ
自ら願いをもち、対象に繰り返しかかわりながら、探究し続ける子ども

１．研究の方向

（１）研究テーマに関わって

本校の総合的な学習の時間は、活動がこま切れになってしまったり、教師主導での活動になってしまったりして、子どもの「願い」をもとに主体的に追究していく学びにつながらないことが多かった。そこで、実践を積み重ね、子どもの学びの姿を全職員で共有することで、子どもの「願い」からつくる総合的な学習の時間の素地をつくっていきたいと願い、本研究テーマを据えた。

（２）研究内容

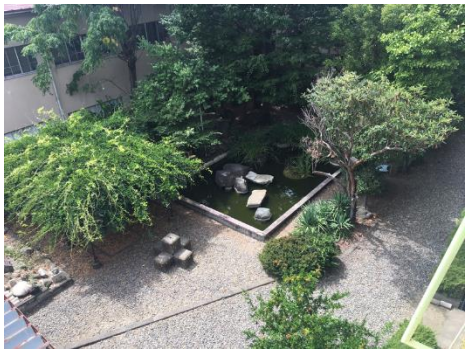
①子どもたちの願いにもとづいた単元展開づくり
・自らの願いをもったり深めたりしていくために、対象と繰り返し関わる時間を保障した単元展開を工夫していく。

②子どもの「願い」を的確に捉えるための振り返りの充実
・活動内容にあわせて、学習カード、ICT 機器、イメージ図などを活用し、子どもたちの気づきや願いを振り返り、蓄積することで指導に生かしていく。

③対象にかかわる　ひと・もの・こと　とつなげる
つながりのきっかけを教師がつくることで、対象にかかわる新たな事実と出会い、次の課題の追究へとつなげていく。

１　単　元　名

「中庭と生きる」

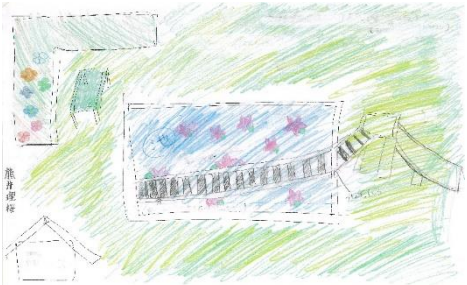


２　単元にかかわる子どもの姿

本校の中庭は、渡り廊下をはさんで東西に分かれている。東側は、学級畑や遊具があり、１・２年生の遊び場である。１・２年生のときにたくさん遊んだ東側の中庭は、３年生になってからは学習に必要な時に入ることができるのみになっている。西側の中庭は、中心に観察池があり、大変深いため、安全面の理由から、西側部分は子どもたちだけでの立ち入りができず、ほとんど関わることがなくなってしまっている。身近にあるようで遠い存在である中庭に対して５年１組では、「授業でたまに入るくらいで中庭に何があるかわからない。」と言っていた。「中庭は低学年の子たちだけのものだよ。」という子もいた。４月、教師が「じゃあ中庭で少し遊ぼうよ。」と提案すると、子どもたちの目は輝いた。久しぶりに中庭に出ると「こんな植物があるんだ！」「ここに魚が住んでいそう。」などのたくさんの発見があった。

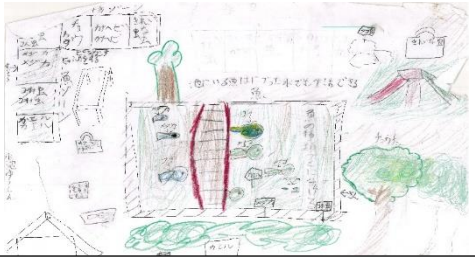
発見をしていくうちに、子どもたちは中庭の魅力をもっと知りたいという気持ちが強くなっていった。初めのうちは「低学年が中庭を利用できるから、低学年の子たちが楽しめるような中庭作りをしてみたい。」という気持ちが強かったが、活動をしていく中で「中庭は面白い。だけどその面白さを低学年だけに知ってもらって終わるのだけではもったいない。」という気持ちが芽生え始めた。まずは自分たち自身が中庭の魅力をとことん知りたいと、何度も中庭に出かけていくと、毎回新たな発見や調べていきたいことが生まれていく。“中庭にどんな願いをもつか”という学級全体としての願いの確認をすると、「全校にも知ってほしい。」「校庭や体育館のように学校にある場所なんだから、全校に開放したい。」という思いが出てきた。中には、「中庭の面白さやワクワクを知らないで６年生が卒業してしまうのは悲しい。」という児童もいた。その個々の思いから「中庭を全校に開放して、中庭をめいっぱい楽しんでもらいたい。」という、学級全体の願いがふくらんできた。そして、願いをかなえるためにまずは自分たち自身が中庭の魅力をとことん知りたいという思いをもって活動した。

その結果、中庭に生きる生物や植物、池や岩石園など様々な魅力に気付いた。そして、今ある魅力と自分たちの願いをもって、子どもたちがそれぞれに「わたしたちの夢の中庭マップ」を作成した。



R 児の願い「中庭に緑を広げたい」
コケが広がる夢の中庭マップ

K 児の願い「中庭に大きな橋を架けたい」
池に橋が架かった夢の中庭マップ

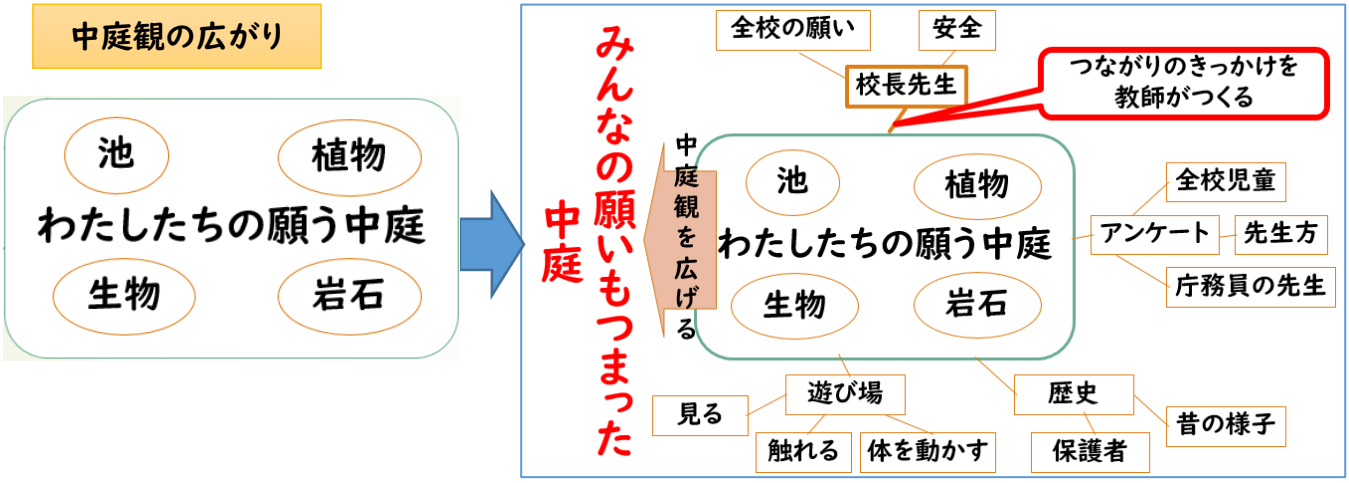


Y 児の願い「中庭の昆虫とたくさん触れ合いたい」
昆虫や生物と触れあえる夢の中庭マップ

これまでの活動をふり返ると、子どもたちは、池・生物・植物・岩石など、自分の興味・関心に応じて中庭とかかわり、調べ活動や体験活動を繰り返していた。対象と繰り返しかかわることで、中庭への興味・関心や活動そのものへの意欲は高まっていったが、「わたしたちの願う中庭」という領域内で活動が終始し、新たな追究を広げていくことにはつながらなかった。

「全校のみんなに楽しんでもらえる中庭にしたい」というクラス全体の願いをもとに、より探究的な学習を展開していくためには、「わたしたちの願う中庭」から「みんなの願いもつまった中庭」へと子どもたちの中庭観を広げていく必要があると考えた。そのために、対象にかかわる「ひと・もの・こと」とつなげることを大切にし、つながりのきっかけを教師がつくることで、対象にかかわる新たな事実と出会い、次の課題の追究へとつなげていきたい。

すでに、「中庭に手を加えるには校長先生の許可がいるのではないか」「中庭について他のクラスの人はどう思っているのかな」と考えている子どももいる。そこで、本小単元は、校長先生とのかかわりをつくるところから始めたい。校長先生の中庭に対する思いを聞くことで、「自分たちだけでなく、みんなの願いもつまった中庭にしたい」という願いをもち、新たな追究が始まっていくことを期待している。



3　小単元の目標

中庭の実態をもとに「わたしたちの夢の中庭マップ」を考えた子どもたちが、自分たちの願いや思いだけでなく、全校みんなの願いや思いもつまった中庭をつくっていくために必要な情報を集め、様々な人の思いや願いを取り入れた「みんなの夢の中庭マップ」を考えることができる。

4　小単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①中庭には、歴史や背景があること、これまでに中庭に携わってきた人たちの思いや全校みんなの思いがあることを理解している。 ②全校みんなの願いや思いを知るために、目的に応じて情報収集したり、インタビューしたりしている。 ③課題解決に向けた取り組みを通して、自分の中庭観が、全校みんなの願いや思いを取り入れたものに変わっていることを理解している。	①課題の解決のため、誰に何を聞けばよいか意識し、解決の見通しをもって計画を立てている。 ②全校みんなの願いや思いを取り入れた中庭づくりのためにインタビューやアンケートをして、必要な情報を収集している。 ③よりよい中庭にしていくために、収集した情報と中庭の実態、自分たちの願いを比較したり、相互に関連付けたりして考えている。 ④校長先生や全校のみんなに自分の考えが分かりやすく伝わるように工夫しながら表現している。	①中庭に対する自分の願いを実現させるために、目標をもって課題の解決に向けた探究に進んで取り組もうとする。 ②学習活動を通して得られた自分と違う意見や考えのよさを生かしながら協力して取り組もうとしている。

５　小単元の大要

学習活動（時間）と子どもたちの意識	支援・◇評価
クラス全体の願い　「中庭を全校に楽しんでもらいたい。」	
１　前単元でグループごとに考えた「わたしたちの夢の中庭マップ」を実現するために必要なことを考える。（１時間） 「中庭に工夫をしていいのか、確かめたい。」 「僕たちの考えたみんなが楽しめる中庭のアイデアを校長先生に聞いてほしいな。」 「校長先生は、どんな中庭がいいと思っているんだろう。」	**対象と出合い、見通しをもつ場面** ・自分たちの思いだけでなく、東小学校に関わっている人の思いも中庭に込める必要があるということを想起させる。 ・安全面を意識できるよう少し触れておく。 ◇態①
２　校長先生にインタビューする。（３時間） ・インタビューの計画を立てる。 ・校長先生夢の中庭マップを見てもらいながら、質問したり、中庭に対する願いや思いを聞いたりする。 **校長先生の　□安全面が心配。** **思いの要点　□学校みんなの願いを取り入れてほしい。** ・インタビューの振り返りをする。	・要点をしぼってインタビューできるようにする。 ・校長先生にインタビューをするときに、校長先生が話したことから考えたことやこれから必要なことを考えさせる。 ◇知①
単元を貫く願い　「自分たちだけでなく、みんなの願いもつまった中庭にしたい。」	
問い　学校みんなの願いを取り入れた中庭にするためには、どうすればよいのだろう。	
３　学校みんなの願いを取り入れた中庭にするために、誰にどんなことを聞く必要があるか考える。（３時間／本時） 「自分たちの願いも大事だけど、全校の願いも必要だね。」 「全校のみんなは、中庭について、どんな思いや願いをもっているのか聞いてみたいな。」 「先生たちにも聞いてみたい。」	**自ら課題を設定し、追究の見通しをもつ場面** ・個で、まず誰に願いを聞きに行くべきかを考えるよう学習シートに書かせたり、なぜその対象を選んだのかを問い返したりする。 ・自分やグループの意見をまとめられるように、jam ボードを利用する。 ・中庭の歴史についても関心が持てるよう、なぜ中庭に岩石園や池があるのか、また授業で使っているのではないかと疑問を持たせる。 ・全体で発表する時、どうしてその対象を選んだか問い返す。　◇思①②　態②
４　全校や先生方にインタビューをし、分かったことや気づいたことを全体で共有する。（５時間） 「〇年生は、自由に出入りしたいと言っていた。」 「理科の先生は、学習に使う場所でもあることを教えてくれた。」	**グループや個で情報収集し、整理・分析する場面** ・相手に合わせて、聞き方や聞く内容を決める。 ・常に自分たちの願いに立ち返り、自分たちの願いに沿ったインタビューになったかを問い返す。　◇思③　態②
５　「みんなの夢の中庭マップ」を作り、発表する。（２時間） 「岩石園を変えたかったけど、理科の先生の思いがつまっていたね。花壇は岩石園以外の場所につくろうか。」 「池をみたい、池で遊びたいっていう願いを聞けたね。どうやったら池を楽しめるか水深や池周りの工夫に力を入れたほうがいいね。」	**まとめ・表現をし、自己の学びを自覚する場面** ・自分たちの中庭観が「わたしたちの夢の中庭」から「みんなの夢の中庭」に変わっていることを意識できるように声がけをする。 ◇知③　思④

6　小単元を通して

校長先生に自分たちの願いを語り、「わたしの願い」から「みんなの願い」へ視点を変えた子どもたち。

校長先生のお話をまとめてみよう

昔・ 昔の人が児童が理科の学習で本物の岩や石を見れるように岩石園を作った。
・ 中庭の木は昭和に植えられた木で、歴史が深い。東小でずっと大切にしてきた。

今・ 安全面について。安全基準がとても厳しい。それを保証できるか。お金もたくさんかかるよ。
・ 休み時間開放することは、安全って言える？
・ 中庭の管理の責任
・ 命の責任

未来・ いろいろつくった時にだれがどう管理していくのか。
・ 命を扱うとしたら「かくご」はあるのか、まただれが面倒をこれから見ていくのか。

思いや願いや持っていて素敵！

話を聞いていてワクワクした。

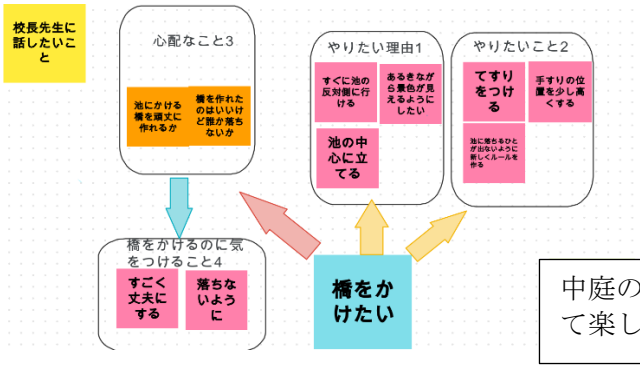
東小を大切にしてくれているね

全学年で楽しめる？

5年1組の思いや願いだけで進めていない？

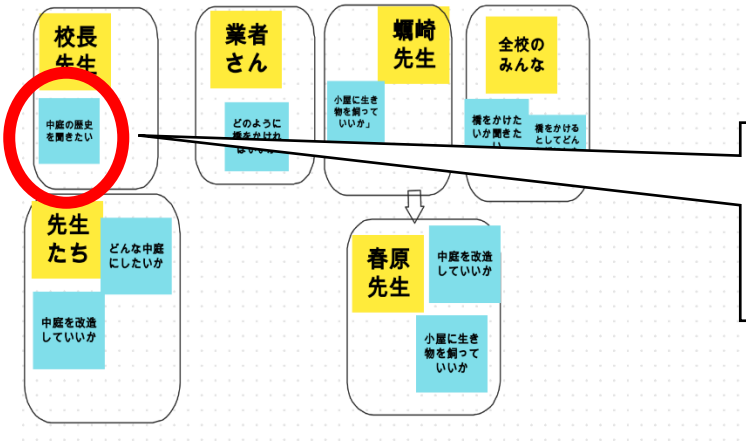
校長先生のお話を受け、自分たちは「みんな（全校）の願い」を聞く必要がある。「自分の願いをかなえるために、情報収集する必要がある。」と考えた。

橋を架けたいと願っていたＯ・Ａ児



中庭の池に橋を架けて、池をより間近で見て楽しんでほしいと願うＯ・Ａ児

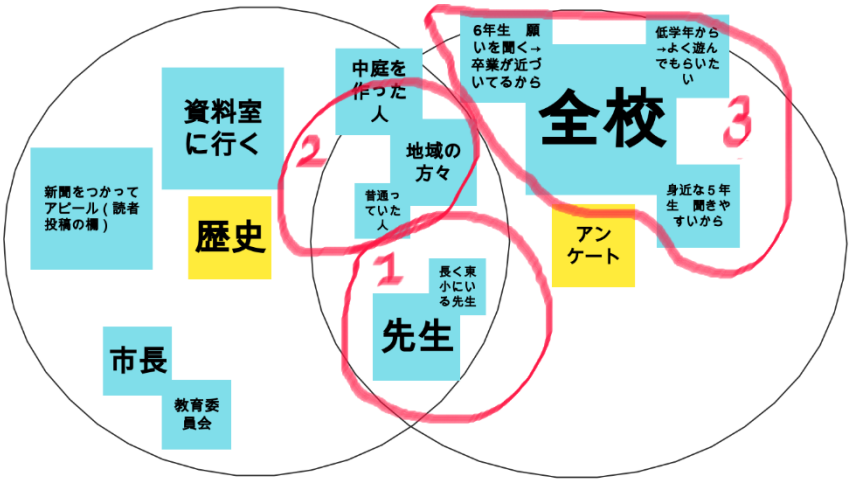
【校長先生のお話し受け、友だちの意見を聞きいた後】



校長先生のお話を受け、中庭の歴史を知りたいと願い、再度校長先生にお話を聞きたいと考えた。

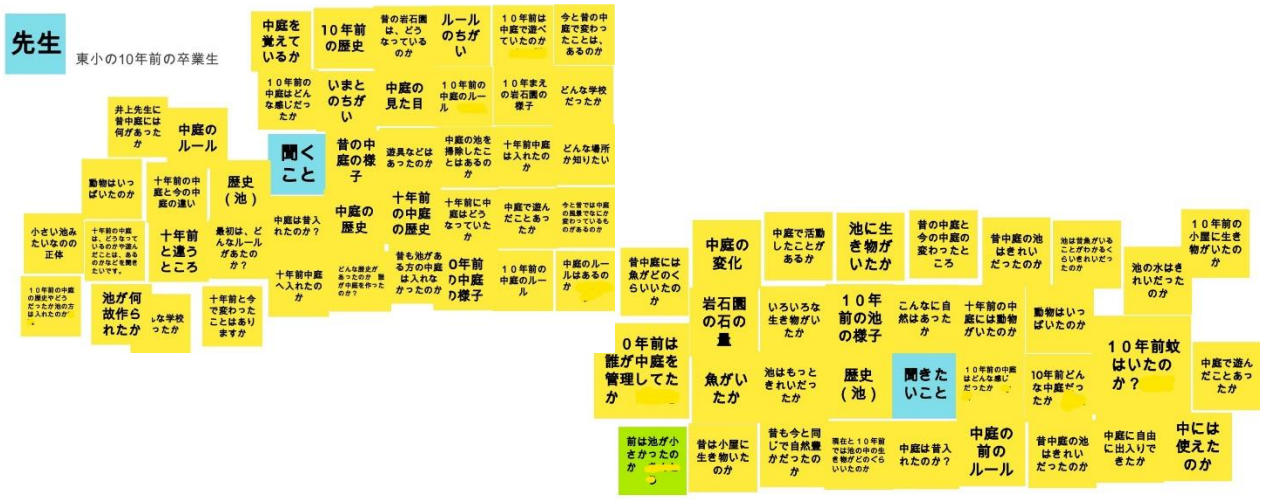
中庭を舞台とし、活動する中で、「中庭を作ってくれた人の思いも知りたい。」と思う児童が増えてきた。特に O・A 児は「自分たちと同じで何か願いをもって中庭を作ったに違いない。」と思い始め、「中庭の歴史を知ることで、中庭を作った人の思いも知れる。」と考えた。

今、自分たちはまず何をするべきかを考えて、jam ボードにまとめた。



「中庭の歴史を知るためには誰に調査をしに行くか。」と「みんなの願いを中庭に込めるために、誰に願いを聞きに行くか。」の２つの視点で対象となる人物や物を改めて考えた。

本校には、教育実習生が９月から来ている。実習生の紹介で「10 年前の東小学校の卒業生」という紹介を聞いた H・S 児や I・S 児は、「10 年前の中庭の様子を知っているんじゃない？」と声をあげた。



【願い】を見つめ直す

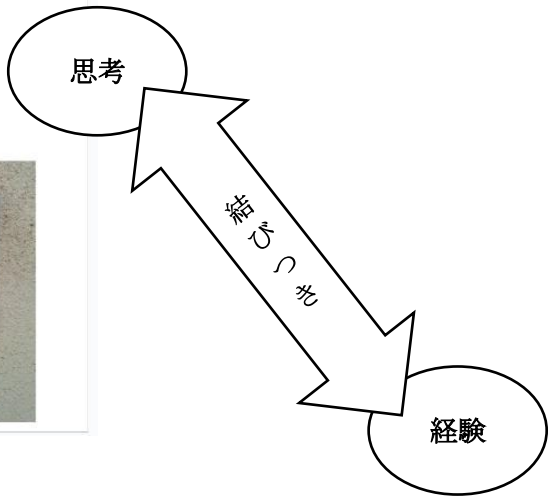
実習生に聞きたい５つのこと
・10 年前の中庭のルール ・10 年前の中庭の池の様子 ・10 年前、中庭に生き物はどれくらいいたのか？ ・10 年前と今の中庭の全体像の違い ・10 年前、中庭で遊んで楽しかったか？思い出に残っているか？

O・A 児は「中庭の歴史」や「中庭に携わってきた人」を思う中で、自分の「橋を架けたい。」という願いは、「橋を架けたり、中庭を好き勝手に改造したりすることは、その人たちの思いを大切にしているのか？」と葛藤を始めた。「今ある中庭の自然を広げることが、みんなの願いを込めることにつながるのではないか？」と自ら納得解を出した本児は、「先生、私やっぱり自然を広げたいんだ。」と相談してきた。相手意識が芽生え、自分の中の課題と向き合い、気持ちに折り合いをつけた瞬間であった。

岩石園を取り壊して花壇を作りたいＡ・Ｙ児

中庭には岩石園といって数十年前まで理科の岩石の学習で使われていた場所もある。しかし、今は雑草が生い茂っており、岩石園の見る影もない。

岩石園の岩や草をすべて撤去し、新しく花壇を作りたいと願いを持った A・Y 児は岩石園の岩石を移動させるにはどうしたらよいかを考える中で、てこの原理の方法を見つける。そして重く大きな岩をてこの原理を使って何度も何度も動かそうと試みる姿があった。これまでは「岩石園をなくす。」考えを持っていたＡ・Ｙ児だったが、「中庭を作った人の思い」を考えていく中で「岩石園を作った人はどう思うのか？」を少しずつ考えるようになった。



そんなタイミングで岩石園に設置されたプレートに気が付いた本児。写真を撮って、情報を整理する中で岩石園のできた年、どこから岩石が運ばれてきたかに気付く。以前自分が岩石をてこの原理を使って動かそうとして、岩石を動かす大変さを経験したことで、「こんな遠くから運んできたのか。」「大変な思いをしてここに設置したんだ。」と考えるようになった。岩石園を作った人や、岩石園でこれまで学んだ人の思いを受けて、本児が今後どんな最適解・納得解を出していくのかしっかりと見届けたい。

７　まとめ

１学期までにはなかった「外からの視点」に触れた。それがきっかけとなり、自分たちの願い・他者の願いにどのように折り合いをつけるのか、正解のない課題を持ち始めた。今、この子たちが最適解・納得解を出せるように、一人ひとりの願いを見取り支えていきたい。

わたしは、「五感で題材と触れ合うこと」を目標に今年度、総合の学習を進めてきた。五感で触れ合えば触れ合うほど、子どもや教師自身のアンテナも高くなることが実感できている。これからも「中庭」という大きな題材と五感を使って向き合い、中庭と共に生きながら解なき問いの追究をしていきたい。

職場名　松本市立安曇小学校　氏名　横山　享司

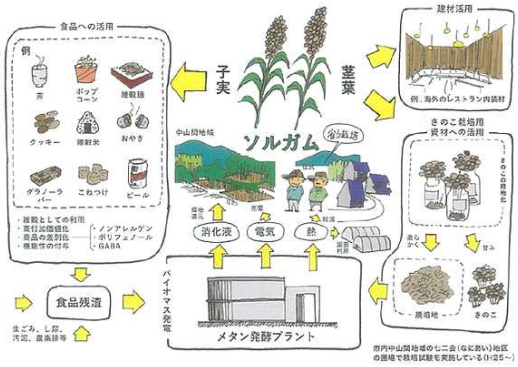
第１３分科会　分科会名　総合学習・生活科

支部名　松塩筑支部
職場名　松本市立安曇小学校
氏　名　横山　享司

子どもが着目した「ソルガムの可能性」と活動の姿

１　「ソルガム」とは

「ソルガムは、「モロコシ」「タカキビ」「コーリャン」などとも呼ばれているイネ科の穀物。原産地はアフリカで、日本には遅くとも室町時代には伝来したといわれています。子実を穀物として、また粉末は小麦粉の代わりになり、さまざまな食品に加工が可能です。信州では昔から米の代用でお餅にして食べられていました。グルテンフリーであり、GABA が豊富など栄養価も高いため、スーパーフードとして健康や美容に関心のある方々から注目されています。」



（https://www.sorghum-nagano.com/　「信州産ソルガム」より抜粋）

ソルガムは、土壌を選ばず、生育が早いので除草の負担が少ない作物です。（種袋に記載）

２　一坪の田んぼで米づくり

小規模小中併設校の安曇小中学校は、学区である上高地など自然豊かな環境の中でダイナミックな体験活動を大切にした学びをしている。令和３年度の５年生は６名。学校花壇の一角にわずか一坪の「田んぼ」がある。３年前に当時の５年生が「開墾」した手作りの田んぼだ。

５年生の見通しを持つ場面で米づくりの話しを切り出すと、Ｂ君が語った。「俺はアレルギーがあるから、あまり作業ができないなあ」これを受けて担任は、「医師の所見を教えて欲しい」と保護者に依頼。すると「花粉の時期は距離をとれば問題なし」との回答を得た。苗作り、田起こし、代掻きの作業を経て、苗「６０株」を田植えした。

３　社会科で学んだ「農家の高齢化」「耕作放棄地」「一発肥料問題」

「私たちの生活と食料生産～米づくり～」単元では、日本の農家の高齢化や食糧自給率の問題を学んだ子ども達。「耕作放棄地問題」を目の当たりにする中で「何とかならないのか」と子ども達。そんな中で松本市内の中山間地で一人で１００枚以上３０ ha の田んぼを「受託契約栽培」する K さんを教材化し授業実践した。標高の違いを利用して作業日程をずらしながら水田を管理する栽培方法。子ども達は「農家の高齢化」「耕作放棄地」問題の解決となる K さんの栽培方法に注目した。一方で、あまりにも枚数が多いので水管理は３日に一度。追肥は１回のみ。その代わりに使うのは

「一発肥料」だ。即効性の肥料と被覆材がある肥料が混在している肥料だ。被覆材が紫外線に反応して割れ、徐々に肥料成分が流出する。一度散布すると絶えず肥料成分が水田に流れ出ることになるから、負担の大きい追肥作業をする必要がない。日本の農家の６０％が使っている。問題は、この被覆材がプラスチックでできており、割れるとその殻は「マイクロプラスチック」となり、海にまで流れ出ていることだ。子ども達は、その後、この問題を卒業まで総合的な学習の時間の主活動として、探求し続けていった。

本実践発表は、米づくりの代替作物と注目されるソルガムにかかわる子ども達の姿である。総合的な学習の時間の副活動として位置付けた。

４　「ソルガム」との出会い

週１回配信される「信毎学習シート」。県内の小中学校の先生が「信濃毎日新聞」の記事をピックアップして発達段階に応じた教科別の問題を作っている。新聞購読をしない家庭が多くなっている近年、記事を通して時事問題に触れる機会をとることと、読解の力をつけていく理由から、週一回のペースでこの「信毎学習シート」を取り組むように促している。

穀物ソルガム 地産地消に力　別紙

信大・長野市など 会設立

穀物ソルガム 地産地消に力

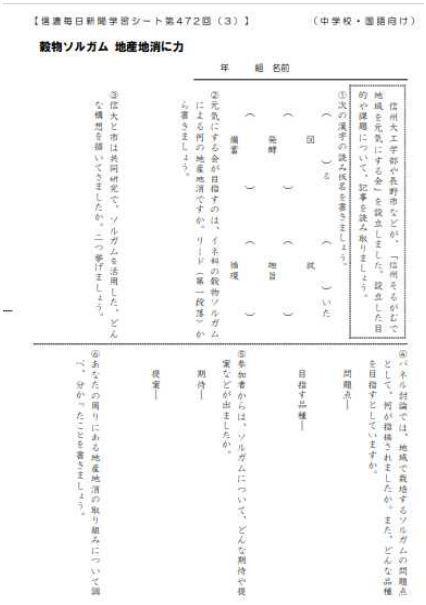
栽培拡大へ 企業や農家と連携図る

「信州そるがむで地域を元気にする会」が開いたシンポジウム

長野市七二会地区で栽培されたソルガム＝2020年９月

「手間掛からぬ」品種 開発も目指す

（2021年8月27日 朝刊・地域面（北信））



【信濃毎日新聞学習シート第472回（3）】　（中学校・国語向け）

穀物ソルガム 地産地消に力

年　組　名前

信州大工学部や長野市などが、「信州そるがむで地域を元気にする会」を設立しました。設立した目的や課題について、記事を読み取りましょう。

①次の漢字の読み仮名を書きましょう。

（　　）る　（　　）いた
団　就
（　　）　（　　）
発明　地盤
（　　）　（　　）
開催　地産

②元気にする会が目指すのは、イネ科の穀物ソルガムによる何の地産地消ですか。リード（第一段落）から書きましょう。

③信大と市は共同研究で、ソルガムを活用した、どんな構想を練いてきましたか。二つ挙げましょう。

④パネル討論では、地域で栽培するソルガムの問題点として、何が指摘されましたか。また、どんな品種を目指すとしていますか。

問題点―

目指す品種―

⑤参加者からは、ソルガムについて、どんな期待や提案などが出ましたか。

期待―

提案―

⑥あなたの周りにある地産地消の取り組みについて調べ、分かったことを書きましょう。

令和３年１０月、社会科「米づくり」単元後に扱ったのがこの記事だ。子ども達は「ソルガムという作物があるなんて知らなかったなあ」「どんな作物か見てみたいなあ」と語った。そんな中でＢ君はこの記事に読み込み、「アレルギー物質がないなんてすごいなあ。これ、もしかして耕作放棄地も救えるんじゃないのかな」と強い関心を持っていた。さらに「今年は米づくりしたから、来年はソルガム育ててみたいなあ」とつぶやいた。この時教師は、Ｂ君がどこまで本気に考えていたのかまだ理解できていなかった。

５　児童会長選挙の公約として

令和３年１２月。令和４年度の児童会長選挙にＢ君が立候補した。公約は「これまでにない新しいことに挑戦する学校を目指す。そうすれば、安曇小学校に転入してくる友達が、ここは楽しい学校だと思ってくれる」と語った。続けて「ソルガムを栽培して、ソルガム迷路を作って、全校の人に楽しんでもらう。さらに、アレルギー物質のない安心安全なクッキーを作る」と演説した。

「本当にできるのか」

教師は、悩んだ。それは「これまで経験のない作物に挑むことよりも、どのように段取りを組み、どんな力をつけるのか」についてだ。素材としての「ソルガム」をどのように教材化するか。「ソ

ルガム」を通して、どのような活動をし、どんな「人」に出会わせるのか。悩んでいるうちに、年度は新たになり、子ども達は６年生になった。

６　ソルガム栽培の実際

手に入れたのは種苗業者から買った緑肥用ソルガム。レタス畑などに蒔き、数十cmまで成長させたところで鋤き込み地力を回復させるものだ。

（1）畑の測量6月6日

学校畑の一番広い場所を６年生に譲ってもらった。畑は上底６ｍ、下底１０ｍ、高さ１４ｍの台形だ。巻き尺で測量し、面積を算出する。１１２㎡だ。模造紙に畑の縮図、さらに迷路の図面を描く。図面を元に、体育で使用するライン引きを使って、畑に種を植える線をつけた。ここまでの作業の全てを６人で行った。数えた種は８０００粒。この作業を全校に協力してもらって撒いてもらおうと考えた。

（2）全校児童集会で「種撒き」6月22日

第１回ソルガム集会。全校といっても２９人。それでも、ライン上に５ｃｍ間隔で撒けばいいことを理解してくれたので作業は２０分で終了した。

（3）草取り7月13日

ソルガムは成長が早いので、他の雑草との生長競争に勝つことができる。しかし、今回は迷路を想定したライン上にしか種を蒔いていないので、ライン間に雑草が出てしまう。これも６人でやるが、追いつかない。そこで第２回ソルガム集会を開き、全校の人に草取りの手伝いをお願いした。２０分で除草できたのは全体の半分。後は、６年生だけで除草。

ソルガムは１ヶ月を過ぎるとどんどん生長し、播種２ヶ月後には２ｍを越えた。

（4）倒れ始めるソルガム9月7日

生長を続けるソルガムの穂が重くなってきた。すると、風の影響で倒れ始める株が出てきた。周囲にロープを張りめぐらし、倒れないように固定。しかし、台風接近のニュースが入り、雨の中さらに固定作業を続ける子ども達。心配そうに空を眺めるＡ君。

（5）全校児童集会で「ソルガム迷路」実施9月9日

ついにこの日が訪れた。念願の「ソルガム迷路」を行い、児童会長のＢ君は公約の一つを実現した。

7　ソルガムの存在を知ってもらうためにメディアを活用

2022.10.8付　信毎こども新聞より

子ども達は、作業負担の少ないソルガムの存在をより多くの人に知ってもらうために信濃毎日新聞に取材の依頼をした。来校してくれた記者の方は、信濃毎日新聞の毎週土曜日に掲載される「こどもページ」担当の方。子どもが目指した主旨とは少し異なった内容となったが、ソルガムの存在を長野県の多くの方に伝えたことについては満足していた。

8　全校児童集会で「収穫」10月6日

４回目の「ソルガム集会」は収穫。稲刈りと同じ要領で収穫できるが、低学年には難しいようで、6 年生がサポートしながら収穫。後で脱穀しやすいように１m程の長さに切ってもらうようお願いした。20 分の集会では全部収穫することはできず、その後４５分かけて６年生が６人で全てのソルガムを刈った。

その後、ソルガムを「はざがけ」し、２週間乾燥。さらに、体育館のステージでお手製の「千歯こき」を使いながら、２週間かけて全てのソルガムを脱穀した。５年生の米作り学習がここに生きていた。しかし、圧倒的な量を全て手作業で行う大変さに心折れそうになりながら、作業を続けた子ども達。収穫量は２３．９kgだった。

9　製粉するために製粉所に電話　11月

昨年度の米作り学習では、脱穀後コイン精米で簡単に精米できた。しかし、ソルガムは「製粉」しなくてはならない。松本市内の製粉所を探す必要がある。

製粉所を調べるために子ども達が取り出したのはタブレット端末。市内の製粉所を探していった。「製粉所」というキーワードで検索しているだけだから、中には、そばやうどんのチェーン店「小木曽製粉所松本駅前店」が製粉所だと思っている子もいた。ならば、製粉所へのアポイントメントも子ども達にやってもらうことにした。教師が「そこは製粉するところではない」と否定するよりも、子ども達自身で調べたことの検証を社会との接点から見つけた方がいいと判断したからだ。

「探した製粉所に電話してね」

「えっ電話？先生してくれないの？」

「最後は先生が製粉所の方とお話するけど、まずは製粉できるかどうか電話で聞いてみてね」

と子ども達を突き放した。

子ども達に聞くと自分からお願いをする電話をした経験はほとんどない。

「ちょっと練習してから電話したい」と子ども達。どきどきしながら事務室の電話を手に主旨を伝えていたが、予想以上にきちんと会話することができていた。ソルガムの認知度が低いためか、先方の相手から聞き返されてるようで「ソルダムではなくてソルガムです」と何度も訴える子ども達。電話口のそばとうどんチェーン店の方も相手が子どもであるからか、丁寧に対応してくれていたようで、電話をした子も恥をかかずに納得したようだった。

６人が電話した内、２件が製粉に協力してくれることになった。１件は梓川にある「丸西製粉製麺所」、もう１件は信州大学工学部を通して「信大発ベンチャー企業 AKEBONO」であった。

AKEBONO は子ども達がソルガムの存在に出会った「信毎学習シート」に掲載されていた企業だったのだ。

10　製粉体験と製粉所見学「ソルガムを通した人との出会い」1月

「丸西製粉製麺所」はそばや小麦等の製粉を行う業者であるが、「ソルガム」の製粉は初めてであるという。年末に店舗で打ち合わせをした教師が、事前に脱穀したソルガムを見せると、「米でいう『精米作業』を終えてから『製粉作業』に入る」という工程を教えてくださった。しかし、「まだソルガムの実に枝が残っているのでもう少しきれいに脱穀しておかないと製粉が難しい」という指摘を受けた。これは教師も含めた子ども達の冬休みの宿題となった。

１月１７日、ベンチャー企業 AKEBONO の方が来校し、製粉のための機械を持ってきてくれた。約１０kgを製粉。子ども達が冬休みに脱穀し直したソルガムを「精米機」にかけた。何度か回転させると、ソルガムの実が光沢を帯びるようになってきた。歓声をあげる子ども達。さらに、「製粉機」で粉にする様子を観察。少しピンクがかったソルガム粉が製粉機から出てくる。時間の関係で荒い製粉しかできなかったので、その後は教室にある「ふるい」を使って、粉を選別した。AKEBONO の方から、「ソルガム料理のレシピ」をいただいた子ども達。クッキーだけでなく、ポップコーンや春巻き、ピザなど多様な料理ができることを知り、ソルガムの可能性に目を向けた。

１月２６日は「丸西製粉製麺所」の見学。粉にまみれた工場内で、製粉作業の工程を学んだ。手際よく作業を進める店主西牧さんの手を見て「職人の手だ」と子ども達。持参したソルガムを「精米」する工程だけを見学し、後を託した。後日、美しく製粉された「ソルガム粉」を見て、歓声を上げた子ども達。「さあ、この粉でクッキーを作るぞ」と意気込んだ。

11　ソルガムクッキー作りで最後の全校児童集会

２月、ソルガムクッキーの試作をしてきた子ども達は、５回目の全校児童集会「ソルガムクッキー作り集会」を開催した。材料の仕分けや分量配分などの段取りを済ませ、「混ぜて手でこねる」体験的な場面を低学年に楽しんでもらい、オーブンで焼きあげて全校や先生方に振る舞った。後日の参観日には保護者にも食べてもらった。「６人でやるには量が多すぎて、草取りや脱穀などくじけそうになったけど、公約で言っちゃったから、今日出来て本当によかった」とＢ君の顔は満足そうだった。

癖のないソルガム粉は、どんな料理にも対応できそうだ。まだまだ、可能性の余地はある･･･が小学校での活動はここまで。卒業まで２週間だった。

１２　ベンチャー企業を立ち上げてみたい

ソルガムにかかわる活動をしてきたことで子ども達のアンテナは高くなった。「今後は、収益を１０倍にする」というベンチャー企業 AKEBONO の新聞記事を目にし、まだまだ認知度の低いソルガム栽培と商品化に挑む AKEBONO を応援したいという気持ちと同時に「自分達も中学校で活動を続けたい。ベンチャー企業を立ち上げてみたい」とＢ君。「本当にできるのか」という疑問はもう沸き上がらなかった。

１３　実践をふり返って

（1）出発点は子どもから

本校では、「総合的な学習の時間」の年間計画を６月につくる。4 年生から上高地の水を追究していた子ども達と「梓川から新潟港に流れこむ水」をテーマにすることを主活動として考えていた。社会科の「農家の高齢化と一発肥料問題」も意図しながら「梓川の水」と絡めての学習展開を予定していたが、年度途中になって「ソルガム」が子ども達の中に登場し、アレルギーのあるＢ君が喰いついた。活動をするべきかの葛藤はあった。しかし、農家の高齢化や耕作放棄地解消の可能性があるソルガム栽培を「やりたい」というＢ君の思い実現することが教師の役割であることだと考えた。

（2）体験して実感する「大変さ」

作業負担が少ないソルガムでも６人で１ａ以上の畑で管理することはやはり「大変」だった。さらに、収穫・脱穀から製粉までを全て手作業する。教師も含めてだれも経験していないから、試行錯誤が続く。ただ、その「大変さ」があったから「ソルガム粉」になった時の喜びは非常に大きなものになった。

（3）ソルガムを通して出会った「人」

「どうしても粉にしなくては目的が実らない」という思いから、製粉所を探した子ども達。実際に製粉に協力してくださった方も、電話口で子どもの趣旨を理解し、丁寧な対応をしてくださった方も、子ども達が出会った「人」だ。自分の言葉で伝え、話を聞き、さらに対話する。タブレット上ではできない貴重な経験を子ども達はソルガムを通してすることができた。

１４　現在･･･

令和５年６月。中学校に進学した子ども達は、中学校の職員と畑に種を撒いた。昨年とは品種の異なる粒の大きいソルガムだ。播種後ハトに食べられる被害があったが、残った種は順調に生育している。これからどのような活動をしていくのか、元担任の教師は、少し離れたところから見守りたい。

2023 年度　長野県教育研究集会
第１３分科会　総合学習・生活科
飯田市立松尾小学校　北條　彩香

「子どもたちの「伝えたい」を引き出す総合的な学習の時間における情報発信について」
～SDGsの取り組みからみえてきたこと～

1　はじめに（テーマ設定の理由）

本校では、総合的な学習の時間の題材は大まかに学年ごと決められている。3 年次では、自分たちの身近な地域「松尾」について、オオサンショウウオ・水引についてインターネットや本、お家の人からの聞き取りを元に情報を収集した。また、その魅力を伝えていく活動として、調べて分かったことを各グループでスライドにまとめたり、劇にしたりして発表した。結果として、本やインターネットを使った調べ学習が中心となり、劇の内容もクオリティも曖昧な状態でまとめになってしまった。また、十分に調べ学習を行い、調べていく楽しさ・面白さは実感できたものの、その情報が果たして正しいのか、初めての人に伝わるのだろうかという情報発信の過程において課題が残った。

そこで、**「①調べた情報を自分たちの言葉で発信すること」**そのために**「②情報収集から情報発信まで地域とのつながりを意識すること」**の２大テーマを軸に子どもたちと１年間総合的な学習に取り組んできた。

3 年次で 1 年間子どもたちと作り上げてきた総合的な学習の時間を深めていく事も考えたが、4 年次では**「主体性をもって楽しく、より深く追求できる時間」**となるように、子どもたちが本当に興味を持てるようなテーマ選びからはじめていった。

2　研究の内容（テーマの選定から具体的な取り組みまで）

（1）テーマの選定

わたしのクラスの子どもたちは、学習したことを自分たちの生活や他の学習へとつなげようとするという意識が低い。学習したことがそのままになってしまったり、与えられた課題をひたすらに解いて満足したりする子が多いため、学びがあまり深まらない。そんな子どもたちが夢中になって調べることができる活動になるように、４年次の総合の学習のテーマは何にしようかと悩んでいた。

ある日、家でテレビを見ていると SDGs 特集が流れていた。「最近よく耳にするなあ。」と思っていたが、ふとM児が３年次の夏休みの自由研究で SDGs に関する取り組みをしていたことを思い出した。

知識も何もないままではあったが、総合的な学習の時間第１時に１冊の絵本「わたしがかわる みらいもかわる SDGs はじめの一歩」を子どもたちに読んでみた。地球の危機に驚愕した子どもたちは SDGs について興味を示した。社会科でゴミ問題を扱っていたということも関係していたかもしれない。さらに、「地球が大変だ！」「このままだとどうなってしまうのだろう」と声が広がっていった。普段あまり、追究心・探究心を見せない子ども達が「もっと知りたい」という願いをくみ取った私は、4 年次では「SDGs について広めよう・伝えよう」という活動をしていくことに決めた。

第 2 時から、とにかく気になった記事・情報収集をする時間を設け、５時間ほど調べ学習と話し合いを進めていくうちに「今地球ではどんな問題が起きているのだろうか」「そのために私たちが今できることは何か」という 2 点について広めていきたいという願いを持った子ども達と以下のテーマで１年間の活動を進めていくことになった。

テーマ「SDGｓについて調べよう！」

～今地球ではどんなことが起きているのだろう？私たちにできることは何だろう？～

（2）－１　研究の内容

（あ）子どもたち一人一人が SDGｓに関する知識を深めるためのスライドづくり

情報収集

多くの子どもたちにとっては、初めて聞く言葉だった「SDGｓ」。「そもそもＳＤＧｓとはどんなものであるかということを調べてみよう」というところから学習が始まった。

SDGｓの基本的な情報を調べていくうちに、

・なぜ世界で取り組まれるようになったのかというＳＤＧｓの背景を調べていく児童

・地球が今、ごみ問題や貧困問題など多くの危機にあるということに気がつく児童

・このままでは自分たちの未来が危ないと感じ、何かできることはないかと調べ始める児童

など SDGｓに関する課題を次々に発見していった。

そこで、2 つのサブタイトルからさらに焦点化し、大きく 4 つの観点から自分が一番興味のある部分について調べていくことになった。

①SDGs の説明グループ

②今、地球で起きている問題グループ

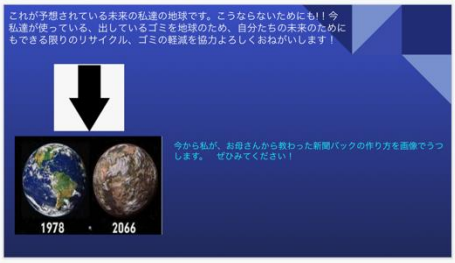
③これからの地球で起こりうる問題グループ

④私たちにできることグループ

整理

これらの情報をクラスのみんなで共有し、一人一人の理解が深められるように本やインターネット、お家の人からの聞き取りを元に情報を収集していった。そして、ICT 活用も考慮しながら一人一スライド（Google スライド）を作って、まとめていくことにした。その時に、①インターネットの情報を鵜呑みにしないこと②自分の言葉に直すことを意識することを伝えた。情報があふれる情報社会で何が正しい情報なのかを見極めること、そしてそれらの情報を正しく理解することに重点を置いた。そうしたことで、わからないことは質問に来たり、仲間同士で確認したり、更に情報を調べたりしていた。そして、自分が理解できるまでとことん追求していく姿があった。

【実際に作成した子ども達のスライド】



【子どもたちの振り返りより】
・SDGsを知らない人にも分かりやすいように書きました。
・スライドづくりの時に世界の残酷なプラスチック問題をどうすれば伝わるのかを考えるのが難しかったです。
・友達にわからないところを教えてもらったり、教えてあげたりして、見ている人がわかりやすいようにスライドを作る事をがんばりました。

（い）スライドづくりを基にした模造紙づくり

共有→深い追究

活動を進めて行くなかで、子どもたちは自分たちの未来が危険であることを実感し、更に多くの人へ伝えていきたいという気持ちになっていった。そこで、まずは学校の人たちに知ってもらうことを考え、一人一人作り上げたスライドを元にグループで模造紙作りに取り組んだ。今まで個人できたこと追求してきたことをグループで共有し、項目ごとに模造紙にまとめていった。

今まで自分が調べてきた情報をグループのメンバーに**共有**し、情報を加えていく作業へと入っていった。今までは自分が分かればよかったのだが、ここで子どもたちに、相手に伝わるためにはどうすれば良いかという**相手意識**が初めて生まれた。そこで伝わりにくい部分や内容があいまいな部分を再びグループで調べていった。新しい情報が加わり、さらに**深い学び**へとつながったように思う。

・子どもたちと学習をはじめていく時に、どうして SDGs について調べるのか目的意識をもち、「何について調べていくか」という課題を明確にした。
⇨課題解決のための資料を自分の言葉で整理することができた。
・個人活動からグループ活動に広げていき、情報の共有を行なった。
⇨グループで仕上げていこうという気持ちから、仲間意識を持つことができた。
⇨子どもたちの深い学びにつながっていくこととなったように感じる。

（う）新聞エコバック作り

自分たちの生活

活動の広がり

（ア）のスライドづくりを行っていた際に、「自分達にできることグループ」で私たちにできることを調べた児童が、家で新聞エコバックを作って学校に持ってきた。家で実際に飼っているペットのゴミや生ゴミ用のゴミ袋として使ってみたそうだ。確かに、生ゴミを入れる袋を新聞にするだけでプラスチックは削減されそうだ。また、他の児童は、ペットボトルを使った小物入れやコースターなども作ってきた。

すると、学校でもトイレ用の袋やティッシュやマスクを捨てるための袋などを新聞紙にできるのではないかと次々に子ども達のアイデアが出てきた。そこでクラス全員に作り方講座を開き、子ども同士で教え合っていった。おり方をおぼえた子どもたちは、休み時間までも使ってどんどんと袋づくりにのめり込んでいった。これは、担任の想定外の出来事だった。

そしてスーパーのレジ袋削減にもつながらないかなとつぶやいてみたところ、「取っ手付きのものがあればいいかな」「お店においてもらえるかな」と活動がどんどんと広がっていった。

・（１）の過程で、自分の言葉でしっかりと理解ができていた。
⇨調べたことを、無意識に自分たちの生活と結びつけて考えられるようになっていった。
・更に自分たちのできることに目を向け始めていくことができるようになってきた。
⇨子どもたちの主体性が育まれ、どんどんと新しい活動に広がっていった。

情報発信への準備

（え）－１　地域とのつながり～情報発信①～

新聞エコバックづくりを２か月ほどつづけたころ、松尾地区でSDGｓに取り組んでいる企業があるという情報を得た。そこで、その企業の資料を教室に置いたところ、子ども達から「会社ではどんな取り組みがされているのかを知りたい」という声が出てきた。

そこでまずは、自分たちのまわりで SDGs への取り組みに力を入れて取り組んでいる会社と交流してみようということになった。そこで、最近 SDGs に関する取り組みを始めたという飯田信用金庫さんにご協力いただくことが決定した。

（Ⅰ）飯田信用金庫さんへの訪問の目的共有

コロナ禍という事もあり、何度もクラス全員で訪問することは難しかった。そこでしんきんさんとどんな活動をしたいのかという事を話し合った。そこで、

①飯田信用金庫さんに自分たちのこれまで調べてきた事を発表したい。
②飯田信用金庫さんの取り組みを聞きたい。
③地域の方にも知って欲しいという願いから、新聞エコバックをプレゼントしたい。

という３つにまとまっていった。特に、②においては学校外に出てSDGｓについての取り組みを知ることは初めてだったため、子ども達にとってとても興味深いものであったように思う。

（Ⅱ）飯田信用金庫さんへの訪問準備

子どもたちは、しんきんさんに向けてさらに活動に熱中して取り組むようになった。子どもたちの中で「誰に」という相手意識が定まったように感じる。

そうなると、子どもたちのアイデアは、「しんきんさんに持っていくためにはサイズごとわけたほうがいいんじゃない。」「これってどういうときに使うのか分からないよね。説明を書こう。」「ダンボールに地球の絵を描こう。」と次々に広がっていった。

（Ⅲ）飯田信用金庫さんに訪問・訪問後

11 月 4 日に飯田信用金庫さんに自分達が持ってきた作品をもって出かけた。子どもたちは、

情報発信

1）自分たちがどのようなきっかけで、SDGｓについて調べ学習を始めたのか
2）自分たちがこれまで調べてきて分かったこと
3）しんきんさんへのＳＤＧｓクイズ

を発表した。SDGｓクイズでは、2）で調べて分かったことを元に、SDGｓの１８個の目標に関するものからプラスチック問題に特化したものまで子どもたちのオリジナリティが発揮されたクイズであった。一部を紹介すると、

・SDGｓはいつまでに達成されなければならないと決められているでしょうか？
・人体にも影響をあたえる小さなプラスチックはなんと呼ばれているでしょうか？

のようなものである。調べたことを自分達の言葉で発表することに加えて、面白く楽しく伝えることができたのではないか。飯田信用金庫さんからも「勉強になった。まだまだ自分達大人も知らないことが多くあると思った。」というお言葉をいただいた。

そして、飯田信用金庫さんからは銀行での取り組みをお話ししてくださった。子ども達からは「へえ～。銀行さんでもこんな取り組みができるのか。」と驚いた様子だった。さらに、学校に戻ってくると「もっと他の会社の取り組みも知りたい。」という声が聞かれた。

子ども達にとって、自分達の身の回りでもＳＤＧｓの活動がされていて、自分たちの活動が少しでも力になったと実感できたのではないかと思う。

【子どもたちの振り返り・感想より】
・しんきんさんにも模造紙を持って行ったときに、しんきんさんがとても喜んでくれたのでうれしかったです。ＳＤＧｓについて話したときに、自分達の方がＳＤＧｓのことを知っていて、あれだけ調べた甲斐がありました。もっとしんきんさんの具体的な取り組みを知りたいです。
・自分達がやったことがいろいろな人に見てもらえたことやみんなで時間をかけて頑張って工夫してできた物が役に立つと思うとうれしいと、ほっとした気持ちが溢れてきました。

・子どもたちは、学校外での取り組みを通して、「誰に」「何のために」活動をするのかという相手意識や目的意識をもつことができるようになった。
・身近な地域でも SDGｓの取り組みがされていることを知って、これまでの自分たちの活動に誇りを持つことができた。
・これまでの活動が子どもたちの実になっていることを実感することができた。

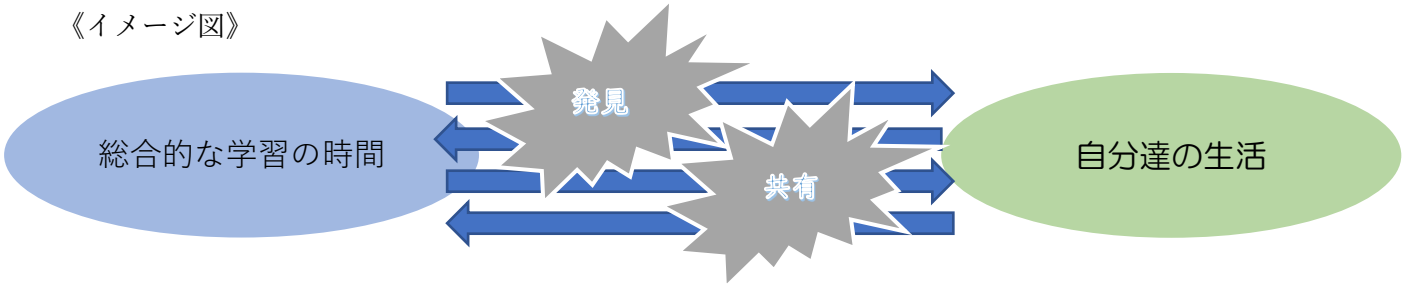
（え）―②　地域とのつながり～情報発信②

これまでの取り組みを通して、自分たちの言葉で地球の危機を伝えていき、SDGs についてもっと広めていきたいという子どもたちの願いから４年次の集大成として、紙芝居を作っていこうと決まった。今まで自分たちが調べてきたことをわかりやすく伝えるためにはどうすれば良いのかという事を意識して、自分達で絵を描く人・文を書く人というように自然と役割分担ができるようになっていた。

作品の中には、みかんの段ボールやプラスチックの袋・ペットボトルなど、これまで自分が生活している中で見たものなどを紙芝居に取り入れている様子があった。無意識に子どもたちが授業だけではな

く、自分たちの生活につなげて SDGs について考えられるようになったことがわかる。

《イメージ図》



完成した紙芝居は、現在も新聞エコバックを置かせていただいている飯田信用金庫さんで読み聞かせの会を開催させていただいた。国語の授業で学習した経験を生かし、読み聞かせの会のパンフレットづくりにも挑戦し、地域とのつながりを意識しながら、自分たちの活動を広げることができた。

（2）－2　各教科とのつながり

国語、算数、理科、社会等の学習にて、SDG s に関連する事項やまとめていく上で必要となってくる知識を習得できるように学習を行った。子ども達の意識としては、あくまで教科の学習となるように留意して、関連づけながら教科横断的な学習を行った。一部であるが、学習内容は以下のようになる。

【国語】…話し合い・まとめ方

国語では、主に話し合う題材として、ＳＤＧｓに関するものを扱った。ＳＤＧｓをより多くの人に知ってもらうにはどんなまとめができるのかということをクラスみんなで話し合った。子ども達の話し合いはとても白熱していた。

【子ども達の話し合いの一部】

「私は、かるたがいいと思います。理由は、小さい子から大人までが楽しみながら SDG s について知ることができると思うからです。」「ぼくは、紙芝居がいいと思います。理由は、かるたは楽しいかもしれないけれど、伝えたいことが伝わらないかもしれないからです。」「ぼくも紙芝居に賛成です。理由は、自分達のオリジナルで作品を創ると、大人の人も聞いてくれていろんな人に（ＳＤＧｓを）知ってもらえると思うからです。」「私はスライドでまとめたほうがいいと思います。理由は、今までもずっとスライドでまとめてきたし、見ている人が楽しいと思うからです。」

なかなかまとまらなかったが、共通して子ども達の意見の中に「多くの人に知ってほしい。」という願いがあることがわかる。2 時間ほど話し合いを重ねた結果、**①自分達が役割分担して創ることができる。②今までやったことのないものに挑戦したい③多くの人に地球の危機を伝えたい**という 3 点から紙芝居作りをすることが決まった。

また、模造紙のまとめ方や既習の漢字等も絡めながら国語としての学習を進めていった。

【社会】…ゴミ問題

最初、子ども達は教科書に出てきたゴミ問題を学習する中で、「地球でこんなにもたくさんのゴミが出ていることを知って驚いた。」「もっと分別をしっかりやらないといけないなと思う。」という感想が多かった。あまり自分事として捉えられていない印象を受けた。

しかし、SDGｓについて学習を進めていくうちに、自分達の未来が危ないということに気がつき始めた。そこで、覚えていくだけの授業から自分たちの地球のゴミ問題へと意識が変わっていったように思う。授業の中で自分たちができることとして、ゴミの分別を覚えたり、ゴミ出しのルールを確認したりした。

また、特別講師として、市役所の環境課で働く方をお招きし、ゴミの種類・分別について教えていただいた。子ども達がよく見るゴミがまだ使えるということ・リサイクル品になるということを知った。子ども達は、普段自分がさりげなくゴミにしていることに「しまった。」「あ～。」と心からの声が出ていた。

このように、教科書に出てくるゴミ問題が自分達の未来にも影響していくことを学習できたように思う。

理科や算数の学習では、地球温暖化に伴う気候変動のグラフの読み取りや貧困率を表したデータの読み取りが主な学習となった。既習の折れ線グラフや棒グラフに加えて、自然と円グラフの読み取りまでできるようになっていった。

（3）－1　　子どもたちの関わり方の変化

総合的の学習の時間を通して、子どもたち同士の関わりも大きく変化していった。

①役割を持つということ

まず、自分たちの仕事を子どもたち同士で**役割分担**をするようになったことだ。誰がどんなことをするのか、いつまでに仕上げていくのかなど見通しを持ちながら協力していく姿が増えた。模造紙づくりや新聞エコバックづくりのなかで得意不得意のあるところを「〇〇君は、ここまで書いてね」「私は、字を書くことは苦手だから絵を描きたい」などと補い合っていた。また、新聞エコバックづくりにおいては、まるで宅配便事業を立ち上げたかのような教室になっていった。新聞エコバックを作る人、作られたエコバックをサイズごと分ける人、段ボールに詰める人、段ボールにサイズを書く人というように役割分担をし、専門的に仕事をすることで限られた時間の中でたくさんの新聞エコバックを作ることができるという**効率化**まで子どもたちが考えていた。声を掛け合いながらクラス一人一人が自分の活動に取り組むことができた。あっという間に総合の時間が終わってしまい、子どもたちからは「はや！」という声が漏れた。

②柔軟に計画を立てるということ

次に、子どもたちが**見通し**を持って活動に取り組むことができるようになったことだ。役割分担をしたことで誰がいつまでに何を仕上げないといけないかということを子ども達で確認することができるようになった。最終締め切りに向けて、自由に活動しながらも時間を有意義に活用していった。そして、間に合わないものは家で自主的に取り組んでくる児童までいた。**教師は、最終提出の日だけ子どもに伝えることで、子どもたちが限られた時間の中で柔軟に計画を練り、自分たちで進めていくことにつながった**。

・グループの中で、自分ができる仕事をそれぞれに分担することで一人一人に役割意識が芽生えた。
・自分に役割があることから、自分の特性を生かすことができた。そうすることで挑戦してみようという主体性が生まれ、自己肯定感・仲間意識を持って、助け合いながら活動ができた。
・計画に縛られず、見通しを立てながら目的意識を持って活動に取り組むことができた。

（3）－2　子どもたちの SDGｓに対する意識の変化

子どもたちは総合的な学習の時間以外で、多くの SDGs に関する発見をしていった。

４年生の９月に社会見学で諏訪湖を見学した。その際に、ある男児が諏訪湖に捨てられているペットボトルを指さし、「みんな！先生！SDGｓが…」とつぶやいた。すると、ほかの子も「ほんとだ…」と肩を落とす姿があった。今まで気にもとめなかったであろう道や川に捨てられたゴミに子どもが目を向けるようになったことにうれしさと驚きを感じた。

学校生活の中でも教師が意図せぬところで子どもたちは SDGｓを発見していく。例えば、給食の時間には、残飯を少しでも減らそうと「一口だけ食べるよ」と協力する児童が増えた。また別の機会では、校庭に落ちているプラスチック袋を、「先生！見て！もう SDGｓなのに…」と怒った様子で持ってきた。また別の日には、「お母さんと買い物に行ったら SDGｓのポスターを見つけたよ。」「昨日テレビでＳＤＧｓについてやっていたからついつい見ちゃったよ、学校で調べたことと似ていた。」などと声を掛けてくれた児童がいた。また、２学期末に行ったテストに「あなたのクラスで頑張っていることを学級新聞に載せるとしたら何を書きたいですか？」という設問に対し。クラスの約６割の児童が SDGs のことについて知らせたいと書いていた。子ども達にとって、自分たちの活動を広げていきたい気持ちの表れだったように思う。

このような姿から、**総合的な学習の時間だけでなく、自分たちの生活に SDGｓの取り組みを結びつけていく姿がたくさん見られるようになったのではないか**と思う。

4　研究の反省と残された課題

今年度の活動を通して、まずは子どもたち自身が資料に書かれている情報を理解し、自分の言葉で説明できるようになる土台作りが重要になってくると感じた。とにかくインターネットを検索し、調べて分かったことをまとめているだけでは学習の深まりにつながらない。情報収集に満足し、そこから発展していけなくなってしまう。子どもたち自身が自分の頭で理解し、自分事としてとらえられるようになってからが始まりなのではないかと感じた。

また、追求活動を個人追求からグループ追求へと展開することによって、個人追求では深まりきらなかった「問い」の答えを仲間とともに調べていくことができた。自分で調べてわからないことは友達に聞いたり、友達に教えたりすることで自然と仲間意識も芽生える。ここでもまた深い学びにつながったのではないかと思う。

何よりも子どもたちが興味を持って、仲間とともにアイデアを出し合っていくことで様々な工夫が生まれた。それらを認め合うことでクラスの雰囲気が自然と明るくなっていったように感じる。「これもやってみたい。」「こうしたらいいんじゃないか」など、自主性がどんどんと芽生えていき、さまざまなことにチャレンジしながら自分が苦手な部分は友達が、友達が苦手な部分は自分が補っていくことで、自己肯定感や自己有用感が高まっていったように思う。そしてさらにこれまでの子どもたちの姿から、総合的な学習の時間がその時間だけで完結するのではなく、日々の生活に結びつくものになっていったように感じる。まさに、インターネットや本の資料から得た知識が自然と子どもたちの生活につながっていった瞬間が感じられた。

一方で、まだまだ課題を感じる部分はある。子ども達の調べ学習ではどうしてもインターネットの情報を丸呑みにしてしまったり、意味が分かっていなくてもそのままの情報をスライドにし

てしまう。また、わからなかった漢字はそのままにしたり、意味が分からない文章はとばしたり自分たちの理解できる範囲のみの情報になってしまう。さらに、スライドや模造紙にまとめ上げるときにどうしても教師である私が介入しすぎてしまうのだ。

また、地域とのつながりにおいても課題を感じる。子ども達にとって、「地域の会社」「地域」というものがどうしても遠い存在であるのか、教師主導型になってしまった。また、一部の子はかなりやる気に満ちている反面で、活動自体に飽きてしまうこともあった。

また、一番の大きな課題としては、のめり込んでから活動の波に乗って、まとめをするとなると 1 年間で作り上げることの見通しの甘さがあった。子ども達の主体性を大切にしながら、あれこれ道が変わっていく事に対して、教師は見通しを持って線引きをしてあげることが必要だということに気づくことができた。

今後、さらに子ども達の言葉で、必要感のある情報発信に向けた取り組みと、「やらされる」地域とのつながりではなく、子ども達から「こんなお店があるよ！」「このお店に行ってみよう！」など子どもの「やりたい」の声から総合的な学習の時間がつくっていけるような教師の「出」について勉強していきたい。

課題解決に向けた今年度の取り組み

《今年度の活動概要》
クラス替えを行ったため、クラスの４分の３ははじめて SDG s を知る。
↓
昨年度の活動を共有しながら、5 年生の「米作り」と絡めた食文化に関する SDG s のテーマを決定する。
↓
SDG s の目標１７のうち、目標１３「気候変動」に目標１１「つくる責任・つかう責任」を絡め合わせながら、フードロス問題・地産地消の取り組みに目を向けて活動を始める。
↓
調べ学習を進めながら、
①SDG s 便りの作成・配布
②ポスターによる呼びかけ
③農家さんとの関わりからフードロス削減に向けたレシピ本の作成
の３つを最終ゴールとしながら、２学期からの活動を進めていく予定。

これらをどこに、どう配布し、どんな願い出活動するのかまでを子ども達に話し合わせたい。
また、今年度新たな試みとして iterminal（アイターミナル）というサイトから活動内容をネット上にアップする活動を考えている。

5　分科会で話題にしたいこと
・教師の「出」（どこまで教師が出ていいのか、また出なければいけないときはどんなときか）
・情報発信において、工夫されていることや実践されていること
・地域との連携（多くの実践例を知りたい）　　・今後の活動に向けての助言

13. 総合学習・生活科分科会

令和５年度　上伊那教育研究会　第 16 分科会「総合的な学習の時間」実践レポート

宮田村立宮田小学校　５学年 富本智子

１　研究テーマ　**地域に学び、地域のよさを実感できる総合的な学習の時間のあり方**
～学びを問い返しながら、地域の「ひと・もの・こと」との
関わりを深める子どもの姿を目指して～

２　単元名　**『それ、あおぞらにできます』プロジェクト**
～資源を最大まで生かし、誰かに喜んでもらえるものを作ろう～

３　活動のあゆみ

はじめに

学校の教育活動に対して協力を惜しまない宮田村の方々に支えられ、伸びやかに成長している宮田小学校の子どもたち。５年生の「あおぞら学年」の子どもたちも、これまでの活動の中で、民話を調べて劇にしたり、地下道の絵を新しくしたりすることに取り組んできた。そのときの様子を聞くと「褒められてうれしかった」「絵の具でぬるのを頑張った」等と話し、やりがいを感じていたことが分かった。しかし「自分たちと地域とのつながり」という点には気づいていない児童もいるように感じた。明るく素直な子どもたちだが、自分の興味のないことへの意欲をもちにくく、やる気がある子どもと気持ちがついていかない子どもとの差が大きいという実態もある。そこで、教師は「この地域にいるからこそ出会える『ひと・もの・こと』と自分とのつながりを実感できる活動、あるいは『やってみたい』『僕たちがやらなくちゃ』と意欲や使命感を感じられる活動に出会わせたい」と考えた。材とのかかわりの中で「気づく」「考える」「働きかける」「受け止める」「また働きかける」ことを繰り返し、自分の学びを問い返しながら地域とのかかわりを深めていくことができたらと思う。

宮田の工場では、人々のことを考えた取り組みがされていてすごいな

４月から続く田んぼの活動のひとつとして、子どもたちは『ふるさと宮田村』の冊子から「駒ヶ原地区の新田開発」について学び、この土地への入植後、苦労して新田開発を行ってきた人々の姿から「これから生まれてくる人や、これから住む人が住みやすいように使うことを考えて頑張っていたのだと思う」などという思いをもった。そして、今自分たちが使っている田んぼも、人々の苦労の上にある土地だと知ると「大事に育てないとね」と口々に言った。こうした姿から、地域の課題や人々の努力は、子どもたちに大切なことを伝えてくれそうだと、改めて感じた教師は『ふるさと宮田村』をもとに、『宮田村の産業』についての学習も進めた。「世界とつながるレコード会社」「様々な用途に合わせたねじを作っている会社」「くらしを支えるものづくりをしている会社」それぞれが、人々のためになっていること、宮田から世界に広がりをもっていることに驚きと誇りの気持ちをもった様子であった。

この布捨てちゃうの？もったいないよ

６月。学習で取りあげた会社のひとつである「タカノ株式会社」の方に自社の特色や技術について学習会と会社案内をしていただいた。子どもたちは、そこで「ロボットと人とで効率よく良い製品を作る仕組み」「人々の願いに合わせた開発の工夫」「化学の力を使った技術のすごさ」などを知った。同時に「女性や外国の人も働きやすい工夫」「環境を考えた取り組み」についても教えていただいた。その技術や SDGｓへの取り組みのすごさに目を輝かせていた子どもたちだが、裁断機の説明の折に、余った布が捨てられてしまうことや、クッション材を作る工程でも余ったクッションが捨てられてしまうことを聞いた。「環境のことを考えているけど、再利用しきれないんだよ」という言葉に「もったいない」「捨てられてしまうならほしい」とつぶやく言葉があった。また、見学の途中でゴミ袋に裁断された布が入れられているのを見たＨ児らは「何でこういうのだめなの（＝捨てちゃうの？）」と社員の方に尋ねた。「商品にならないからだめなんだよ」という言葉を聞いても、まだ子どもたちはゴミ袋の中を見つめていた。

その後、社員のＩさんから「自分は廃材を貴重な資源だと思っている。でも、まだ再利用しきれていない。みんなのやわらかな発想力で、この布やクッションでできそうなことを考えてくれないかな」という話を聞いた子どもたちは「枕ができるかな」「ポーチを作ってみようかな」などとつぶやいていた。

教師は、これらの子どもたちの様子から、捨てられてしまう布やクッションは「もったいない」「何とかしたい」という課題意識をもち、試行錯誤しながら、考えたり働きかけたりして学びを向上させていくことにつながるのではないかと考えた。さらに、納得いくまで役立つものを作っていく過程で「僕たちが作ったものを喜んで使ってもらえるように」などという相手意識をもって活動を進めていくのではないかと考え、子どもたちとともに「端材をよみがえらせるプロジェクト」を実行していくことにした。

「これ、いいじゃん」って思ってもらいたいな

学校に戻った子どもたちは「タカノさんはすごい会社だった」と話した。「どんなところがすごいの」と尋ねると「環境のことを考えている」「働いている人を大事にしている」「使う人のために頑張ってる」などと答えた。続けて、Ｉさんが投げかけてくれた言葉をふり返ると「ぼくたちに期待してくれている」「タカノさんの気持ちに応えたいな」と話す子どもたち。「タカノさんみたいに、誰かに喜んでもらえるものを作ろうよ」という言葉に、教師が「誰に喜んでもらうの」と返すと「世界の人たち」と大きな声で続ける。話し合いは続き「資源を最大まで生かし、人に喜んでもらえるものを作ろう」というめあてを設定した。Ｙ児は「『これ、いいじゃん』って思ってもらえるものができるといいな」と笑顔で言った。

喜んでもらえるものってどんなものなんだろう

布やクッションを手に取って「自分たちにできそうなもの」を考えているとき「筆箱」「服」などさまざまな意見とともに、その中に「さわっているうちにほつれてきちゃったよ」という声が出てきた。「ほつれてきちゃうし、いすに使う布だからかたいよ」「それに伸びない」―そんな発見

を話し始めた子どもたち。布やクッションの素材に合ったものを考えていくことになった。

子どもたちは自分たちで考えたり、家の人に相談したりしながら「赤ちゃんでもさわれるやわらか積み木」「買い物をする人のためのエコバック」「水筒カバー」など１８のアイディアを出した。その良さや課題を挙げ、自分たちで考えた３つの観点（「安心安全で快適に使えるか」「布やクッションの材質に合っているか」「無駄にならないか」）に当てはめながら、作るものを決め出そうとした。「赤ちゃんの積み木は赤ちゃんが食べちゃうんじゃない」「じゃあ、保育園の子ならどうかな」「保育園の子は喜んで使ってくれるのかな」「クッションはおじいさんおばあさんに喜んでもらえるかもしれない」・・・こうした話し合いを続けたが「本当に使ってもらえるのか」「喜んでもらえるのか」は想像でしか考えられない。そこで、実際に地域の人たちが必要と感じるものを聞いて、もう一度話し合うことにした。

子どもたちは、保育園、飲食店、デイサービス、公共施設など１９の場所でアンケート調査を行った。アンケートを受け取って帰ってきた子どもたちは「おじいさんおばあさんが手足を置けるような除圧クッションを絵にかいて説明してもらった」「役場に行ったら、宮田村のキャラクターの『みやさん』を自由に使っていいって言われたから、オリジナルなものが作れそう」と笑顔で話した。全部で３０近くの考えが集まり、これらを「うれしい度」「使ってもらえる度」「作れる度」に点数化しながら、作るものを決め出していった。活動を始める前には「世界の人を喜ばせたい」と言っていた子どもたちの姿があったが、アンケートをとったことにより「誰かに喜んでもらいたい」の対象が子どもたちの中で明確になってきたように思われた。

〈学習カードより〉
○アンケートを見ながら、本当に必要なのか、作れるのかを考えた。布やスポンジでこんなに人のためになれるんだな、と思いました。
○2 人でたくさんの意見を出せて、これは人の役に立つものがあるなと思い、アンケートを書いてくれた人に感謝です。
○アンケートにたくさん書いてあって、思いがこめられていたのでうれしかったです。この思いに全力で応えたいです。

リサイクルポイント達成１００％を目指して頑張ろう

作るものは「エコバック」「除圧クッション」「みやさんのワインケース」「肘置き・手足置き」「コースター」「保健室用枕」「プレゼントボックス」「保育園で遊べるもの（ぬいぐるみ布団・エプロン・スカート・的当て）」「スポンジボール」に決まった。意識していきたいことを出し合い、【形】【大きさ】【強さ・安全】【使う人が嬉しい】を製品づくりの振り返りのポイント（リサイクルポイント）として設定した。現在「リサイクルポイント１００％達成を目指して頑張ろう」というめあてをもって計画書を作り、試作を繰り返している子どもたちである。

プレゼントボックスグループは、学校近くにある商店街の「手作り屋」さんで見たプレゼントボックスを参考にして形を作り始めた。リサイクルポイントの【形】は「物が入れやすい四角型。ワクワク感を出すためにふたをつける」。【大きさ】は「大きすぎても小さすぎてもだめ」。【強さ・

安全】は「こわれない。かたくなく、やわらかく、いたくない。けがをしないように」。【使う人が嬉しい】は「男女関係なく使えて無駄にならないもの」―とした。

プレゼントボックスづくりを担当する子どもたちは「誰かに喜んでもらえるもの」として、作り始めたものの、初めは「対象」が定まらず、形や大きさが決まらなかった。話し合いの中で「商店街の洋菓子店でクッキーなどを入れる箱に使ってもらい、箱にキャラクター『みやさん』をつけることで村の良さをアピールできるのではないか」と考えてお願いしてみたが、残念ながら、食品を扱う店では使うことができないと分かった。「どうする」と教師が尋ねると「小さい子とかに喜んでもらえるといいな」と返ってきた。そこで、村の「すこやか健康センター」に尋ねてみると「4 か月児検診でおむつをプレゼントするんだけれど、おむつを入れる箱はどうでしょう。産まれる人数だから、60 個ほどだけれど」と声をかけていただいた。

そのことを子どもたちに話すと、担当している 4 人の子どもたちは、数の多さに驚き「わぁ、大変大変」と言いながらも、手の動きが変わった。ボール紙で作った箱に、布を貼る方法を地域講師の先生に教えていただけたことも後押しとなり、より張り切って活動を進めている。

現在、プレゼントボックスグループ以外のグループも、より目指すものになっているかを見返しながら、試作を繰り返し行っているところである。

4　今後の活動と教師の思い

現在『それ、あおぞらにできます』プロジェクトは始まったばかりである。試作を繰り返しながら、納得いくものができたとき、子どもたちは、地域の方に使ってもらったり、小さい子に遊んでもらったりして、その声を聞き、また見返しながらより良いものを目指して創り上げていくだろう。また、タカノ株式会社の方に「みんなのアイディアを教えてください」と投げかけていただいている子どもたちは、活動の終わりを迎えるころ、タカノ株式会社の方に、自分たちが作った製品のことを伝えていくだろう。教師は、活動が始まったころは、活動のゴールとして『こんなにいいものができましたよ』と子どもたちがプレゼンテーションすることを思い描いていた。しかし、子どもたちの姿を見ていると『ぼくたちが作ったもので、地域の人がこんなに喜んでくれている』ことを伝えていくのかもしれないと考えている。

総合的な学習の時間は、難しい。けれど面白い。子どもたちは、自分で考えて試し、友だちの考えの良さを取り入れて試し、地域の方の技から学んで試し、自分の学びにしていく。活動するごとに新たな気づきや動きがあり、教師の思い描いた姿を超えて、材とのかかわりを深めていく。

この活動のゴールがどんなふうになるのかを楽しみに、じっくりと子どもたちとの活動を続けていきたいと考えている。

５　教材研究

（１）素材

①タカノ株式会社

・宮田村に本社のある椅子を中心とした工業製品を開発・生産する会社である。
・お客様のニーズに合わせたものづくりを目指しており「福祉・医療機器」「エクステリア」「健康食品」「オフィス家具」「バネ・ユニット」などの領域がある。
・1941 年東京で創業。疎開後 1953 年に宮田村に工場を移す。受け入れてくれた宮田村に感謝し、その後、さまざまな分野で地域貢献を果たしている。
・従業員数 687 名。目標「みんなが豊かに暮らせるよう、ものづくりを通して貢献していく」こと。
・環境への取り組みとして「ごみ拾い」「森林整備」「プラスチックスマート運動」などを行っている。従業員の池田さんは、産業廃棄物として捨てられている物の中に「資源化」できるものがあるのではないかと考えている。
・Ｉさんは、学習会の折に「ものを通じて　心が動いて　ミライがちょっと変わる」ことを目指し、仕事やものづくりに誇りをもって働いている」と話してくださった。

②廃棄される布やクッションの素材

・布：椅子を作るのに端材として出るポリエステル素材のもの。
・クッション：「イソシアネート」「ポリオール」という薬剤を混ぜ合わせてできる。毎日テストで作るものが端材となって捨てられている。

（２）素材を教材へ

研究テーマ　地域に学び、地域のよさを実感できる総合的な学習の時間のあり方

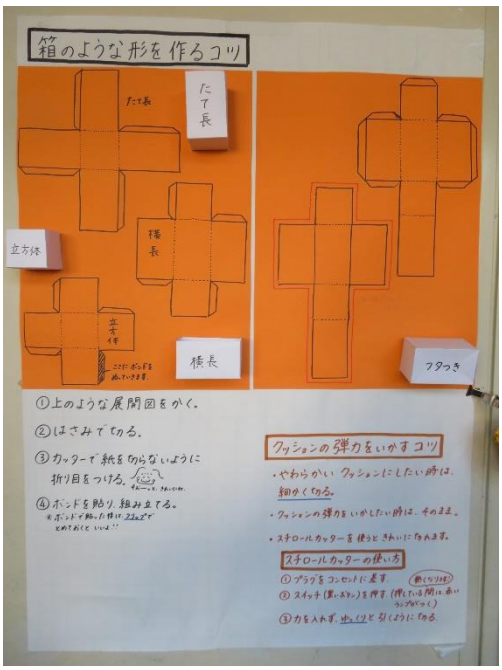
5 学年探究課題　宮田の産業とそれに携わる人々の思いや願いを知る

観点		予想される活動の深まり
素材の魅力	・使い手のことを考えた商品開発を行う会社〈→相手意識〉 ・SDGS への意識が高く、環境や従業員の働きやすさに配慮した取り組みが行われている会社〈→環境や多様性の配慮への大切さ〉 ・布やクッションの品質の良さ<→より良いものへの追究> ・社員の方からの「アイディアが欲しい」という依頼の言葉<→任された使命感> ・何度も製作を繰り返すことのできる材〈→問い返しながら向上させていく喜び〉 ・友だちと共に活動したり、地域の方の思いをきいて活動に反映したりできる材〈→自分にはない視点や協働のよさへの気づき〉 ・児童が考えた製品をタカノ株式会社に提案したり、地域の活動に広げていったりすることができる可能性のある材〈→活動が発展していくわくわく感〉	タカノ株式会社のすごさ（製品・理念・人・ＳＤＧｓの取り 布やクッションが捨てられてしまうことの驚き 任されたことへの使命感 自分たちにできることへの気づき 作るものの決め出し ①作れそうなものを自由に発想 ②「誰かのため」「環境を考えた」「自分たちの力で」の視点からの意見交換 ③地域の方からの意見 ④良さや課題を出し合って決め出し
児童の実態	・好きなことや得意なことに熱中して取り組む。一方で、自分とかかわりの少ない人への相手意識をもちにくい児童も多い。 ・自分と環境とのかかわりを考える機会は少なかったが、タカノ見学や臨海学習（海のごみ）で意識をもち始めている。 ・見学の際に布やクッションが廃棄になっていることを「もったいない」「何とかならないのか」と感じていた。	

児童の実態	・任されたことに、いきいきと取り組める児童が多いが、取り組み方には見守りが必要。 ・図工「のぞいてみると」の学習では、いろいろな材料で好きな形を作り出す学習に意欲的に取り組んでいた。 ・学習や活動の中で友だちと一緒に取り組むことで動き出せる児童が多い。自分や自分のグループの考えを変えていくことに抵抗を感じる児童もいる。 ・素直な気持ちをもっており、話し合いや学習が深まっていくと、より活発に思いを伝えたり自ら動き出したりすることができる。	製品づくりの深まり ①リサイクルポイントの設定 ②グループの友だちとの計画と製作 ③他のグループの友だち、タカノ株式会社の方、地域の方からの意見 ↓ 自分やグループの取り組みの様子を問い返し、新たな働きかけを考えながら活動を進める。
教師の願い	・1村1校の変わらない関係の中で、知らない誰かのことを想像して働きかける経験が少なかった。そうした力を育てたい。 ・身の周りの課題に目を向け、自分にできることに力を注げる人になってほしい。 ・SDGSの課題について知り、他教科との関連も図りたい。 ・見学で感じた「もったいない」「何とかしたい」という気持ちと任せてもらえたという思いを軸に、納得いくまで追究を続けてほしい。 ・相手意識をもち、タカノ株式会社に提案したり、地域の人に使ってもらったりするための方法を考えてほしい。 ・考えをもつことの大切さと共に、自分にない考えを取り入れて視野を広げていくことの大切さも感じながら活動を進めてほしい。 ・自分たちの力で成し遂げたことに対して周りが応えてくれることを知り、見守ってくださる地域や会社の人たちの温かさを感じてほしい。	タカノ株式会社への提案 ①タカノ株式会社の方からの言葉でさらに改善する部分は改善する ②納得いくまで取り組んだら、身近な場所で役立てられる方法で「世に送り出す」

（３）活動における教師の手立て

・繰り返し活動できる材料の準備、場や時間の設定
・児童の活動の様子を見守り、必要な場面での「出」
・子どもたちの姿を記録し、活動や話し合いのよりどころとなる思いを言語化
・「考えを伝える」「まとめる」「記録を蓄積する」等の場面でのＩＣＴ機器の活用
・子どもたちの活動の広がりを考えた、事前の教材研究やワークシートの作成
・子どもたちでは難しいと考えられる場面に対する、掲示物等での支援



学習していないことや、既習事項でもどう生かしていけるか分かりにくい事項に関しては、掲示物や動画の提示等で支援を行っていく。

（４）他教科との関連

社会科「くらしを支える工業製品」「環境を守るわたしたち」
国語「みんなが過ごしやすい町へ」
家庭科「ひと針に心をこめて」「ミシンにトライ」
キャリア教育「宮田村の産業を支える会社」

（５）期待される学びの姿

・自分たちの力でやり遂げられた自信や誰かの役に立てた有用感
・自他の考えを取りいれ、内容を深めていく活動の進め方の体得
・地域の課題解決を目指して働きかけていこうとする社会への参画意識の醸成

職場名　駒ヶ根市立赤穂南小学校　氏名　森田志歩

第１３分科会　分科会名：総合学習・生活科

支部名　上伊那支部
職場名　赤穂南小学校職場会
氏　名　森田志歩

１人１人が願いをもって心ゆくまで追究するなかで お互いのよさや違いを認め合う子どもたち

1　全校研究テーマ　　問いに生きる　～その子らしい見方・考え方が深まる授業～

2　研究において大切にしたいこと

①問いに生きる子ども

人が生きるということは「連続的な問題解決」である。生きていく中で、問いが生まれ、解決したと思ったら、また次の新しい問いが生まれてくる。子どもたちの日々の生活や学習も、解決とともに、次の問題が生まれ、次々に生まれる新たな問いに向かって、子どもたちは生きていくことになる。このように、人が生きていく上での「真に生きる力」を子どもたちに育みたい。

②問いに生きる教師

私たち教師自身も、一人の問い続ける人間として、問いから問へと自分を更新していく教師でありたい。「こうあるべき」という一方的な見方で子どもたちを見るのでなく、子どもたちの姿から自分を顧みて、教育観や指導力を磨いていく。また、子どもたちの問い続ける姿をとらえられる教師でありたい。「子どもたち一人ひとりがどう考えているのか」「目の前の子どもたちに必要な手立ては何なのか」問い続け変化する子どもたちの「その子らしい見方・考え方」をとらえていく。

③　問いに生きる授業

「生きる力」を育むためには「問題から解決、そして、新たな問題へ」という流れの「思考力・判断力」を高め、育むための授業を行う。「思考力・判断力」は「知識」と違って教えることはできない。そのため、みんなで考え話し合う場を設け、友の考えを聞き、自分の考えと比較関連させて、深い考えに至るような授業を行う。

3　低学年部会（生活科）研究テーマ

～１人１人が願いをもって心ゆくまで追究するなかで、お互いのよさや違いを認め合う子どもたち～

（1）自然のなかで、心ゆくまで追究する子ども

赤穂南小学校に隣接する自然体験園があったり、学校周辺に豊かな自然がたくさんあったりする。そんな自然豊かな環境のなかで、子どもたちは自分のやりたいこと、楽しみたいことを思い切りやりきることができる。また、豊かな環境のなかですごす子どもたちだからこそ、子どもたちの興味、関心が起きやすい。そんな子どもたちから生まれた興味関心から「もっとこうしたい」「次はこんなことをしたい」という願いが生まれるからこそ「こんなことをするにはどうすればいいのだろうか」という問いも生まれてくるのではないだろうか。問いが生まれるためには、それを支える子どもたちの願いが不可欠であると考える。子どもたちが日々の学校生活のなかで、願いをもって、心ゆくまで追究していく楽しさを感じてほしい。

（2）お互いのよさや違いを認め合う子どもたち

子どもたちが、それぞれに追究を進めていくと、教師が指示をしなくとも、自然と子ども同士のかかわりが生まれてくる。また、自分が追究をすすめることで、相手の追究のよさや違いにも気づき、お互いを認め合うことができるのではないだろうか。１人１人がまったく同じ願いをもっていなくとも、学級として、同じ方向を向き歩むことで、お互いを理解し合い、課題を解決したり、学級の仲間と一緒にいることのよさ、学校にいることのよさを感じたりしてほしい。

4　題材によせる教師の願い

本題材では、自然とふれあうことが好きな子どもたちが、採ってきた草花を使って染めものを楽しむなかで、自分の見つけたものからどんな色が生まれるのか、どんな模様ができるのか、想像し、やり方を考え、やってみることに魅力があると感じている。同じ植物でも、花・葉・茎・実など場所によって色が異なったり、季節や日によって色の出方が変わったりするため、子どもたちはやってみたいことがあふれている。また、活動のなかで、触覚、味覚、嗅覚など五感を働かせ、全身で感じている様子や、材料や染まり方などを通し、季節の変化を感じている様子もみられる。このように染めものを楽しむことで、自然（季節・環境・植物）のなかから生まれる自分の気づきや発想を大切に、追究していくよさを感じるきっかけになってほしい。そして、友だちの活動や発想のよさや違いに気づいていってほしい。

５　評価規準

	A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
本題材の評価規準に盛り込むべき事項	身近な自然を観察する活動を通して、自然の様子や四季の変化に気付いている。 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付いている。	身近な自然を観察する活動を通して、それらの違いや特徴を見付けている。 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、使う物を工夫してつくっている。	身近な自然を観察する活動を通して、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとしている。 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしている。
学習活動における具体の評価基準	植物の違いによる染め上がった色の違いだけでなく、植物は同じでも手順や分量などの些細な変化による染め上がりの違いに気付いている。（A－１） 濃い色が染まるために下処理をしたり、模様を付けるために布に輪ゴムなどをつけたりしている。（A－２）	季節によって、学校周辺にある染めものに使うことのできる植物の種類や量の変化や、美しさや色合いに気付いている。（B－１） 植物の色と、染め上がった布の色や濃さの違いや、模様の美しさやおもしろさに気付いている。（B－２）	学校周辺の自然とかかわりながら、染めものにしたい植物を見つけ出し、染めものやたたき染めをたのしんでいる。（C－１） 友だちと染めものに使う植物を協力して集めたり、染めもののやり方を相談したり、染め上がったものの違いやよさを比べたりしている。（C－２）

６　学習構想　題材名『学校の周りの草花を染めてみよう　～秋～』（全１６時間）

子どもの意識の深まり	○予想される子どもの動き　・学びや育ち			
	○どうしたら色が残るか調べて染めてみよう（８）	評価	○学校の周りの草花を探して染めてみよう（８）本時	評価
春に染めた布の色が消えてきちゃった。どうしたら色が残るのかな。模様をつけたいけど、色が薄くて、模様がつかないな。 教わった方法で試してみたいな。どんな色が出るか楽しみだな。模様もできるかな。 夏とは違う花や木の実があるよ。葉っぱもたくさん落ちてきた、これでも染まるかな。 模様がついた。他の模様もつけてみたい。私の模様のここが好きだな。 寒くなってきてだんだんと染められるものが減ってきたよ。冬でも染めものを楽しみたいな。	・色を定着させることへの思考や実践 ・染めものについて知っている人に聞くことによる考えやできることの広がり ・やりたいことをとことんやる楽しさ ・色を残せたことへの達成感 ・自分なりの染め方や模様の工夫	(A－１) (A－１) (C－２) (C－１) (A－１)	・秋の草花の豊かさ ・夏から秋へ向けた植物の変化 ・植物の傷みやすさ ・色への気づき ・匂いへの気づき ・春・夏との違い ・染まるかどうか予想をし、自分で試すことでの思考や試し（染め方の工夫） ・模様作りの工夫 ・下地や媒染の効果や違い ・色々なもので模様ができること ・自分だけの模様をつける達成感 ・友だちの染めた色のよさや違い	(B－１) 〃 〃 〃 〃 〃 (A－１) (A－２) (A－１) (B－２) (C－１) (C－２)

７　１学期のあゆみ

４月１０日、子どもたちは、体験園に行って春探しをした。そして、生き物を探したり、草花を摘んだり、友だちと走り回って遊んだり、思い思いに春の体験園ですごした。A、B は名札の安全ピンの穴にオドリコソウやペンペングサ、タンポポをさし、ブローチのようにして、見せ合っていた。そんななか、摘んだ草花の入った袋に水を入れ、色水遊びをする子がいた。色々な草花を一緒に入れる子が多いなか、C はタンポポだけを集め、川の水を入れもみ続けた。他の子の水には、ほとんど色がつかなかったが、C の作った色水はきれいな黄色になった。それをみた A は「やってみたい」と言い、その場で試した。

それから、子どもたちは学校近くの馬見塚公園に行った。D は「よもぎ食べたい」とヨモギを探し始めた。そして「家でヨモギ団子作ったことあるよ」と話しながら、笑顔でヨモギを探しては摘んだ。公園からの帰り道でも、D は「あ、あった」とヨモギを見つけては走ってヨモギの場所まで行っては摘みながら帰った。教室へ戻ると「おれ、学校のどこにヨモギがあるかわかるよ」と自慢げに話した。

４月１１日、ヨモギをみんなで食べるには足りなかったので、子どもたちは体験園にも採りに行った。D は「いっぱい採ろう」と話し、最初はよもぎを摘んでいたが、次第に体験園に流れる川へ向かっていった。そして、E や F と一緒に、去年サワガニを見つけたところへ行き「カニいないかな」と棒で川の砂利をつついたり、石をひっくり返したりした。それから「カニ見つけたらここに入れる」と今まで摘んでいたヨモギを袋から出し、石の上に置いた。それからしばらくサワガニ探しをしている間に、ヨモギはなくなっていた。D は「ヨモギどっかいっちゃった」と言った。子どもたちは、その後も春探しの際に、ヨモギ摘みをして、みんなで食べられる量のヨモギを集めた。

やがて子どもたちは、春探しの時間だけでなく休み時間にも、色水遊びをするようになっていった。色水作りを繰り返す子どもたちのなかで、GとHは「作った色水で折り染めをしてみたい」と言い、作った色水を紙につけた。しかし紙の色はほとんど変わらなかった。それを見た子どもたちは「もっと濃い色水を作ろう」と言い、水の量を減らして再度紙をつけてみた。最初はうっすらと色がつき、喜ぶ子どもたちだったが、乾くと色は消えてしまった。

４月２０日、Eは休み時間に図書館へ行き、染め物の本を借り調べた。すると、水はほとんどいらないことが分かり、ムスカリで色をつけることにした。Eは外で材料集めをするときにも本を持ち歩き、その都度やり方を確かめた。採ってきたムスカリにほんの少しの水を入れ、手でもんでみたが、ムスカリから色水はほとんど出てこなかった。また、布にムスカリを入れて絞って色水を出そうとしたが、出なかった。Eは「水出ない。あはは、手がすごいことになった」とみんなに紫色になった手を見せた。さらに、しぼった布を見たEは「あっ布が紫になってる」と言った。紫色がついた布を見たDは「すげえ」と大きな声で言った。そして次々に子どもたちはEの絞った布に集まり「見せて」「すごい」「どうやってやったの」と話し続けた。

５月１１日、みんなで食べる量のヨモギが集まったので、食べることにした。当初はヨモギ団子を作ろうとしていたが、あんこが苦手な人がいたり、初めての調理活動なので自分たちができるものがいいと考えたりして、ヨモギのパンケーキを作ることにした。ヨモギを鍋に入れると子どもたちは「すごい匂い」「黒い」「おれの作った液より濃い」とつぶやいた。ヨモギをざるにあげ、調理を続けようとすると、H は「煮た汁が欲しい」と言った。教師は「どうするの」聞くと、Hは「染まるかもしれないから」と言った。教師が、Hの考えをみんなに伝えると「染まると思う」(H)「染まるけど薄いんじゃないかな」(I)「染まんないけど、ほんの少しだけ色がつくと思う」(G)「最初はつくけど明日になると消える」(J)「最初薄くて濃くなる」(D) と、それぞれ予想し合った。そして煮汁を冷蔵庫で保管し、染めることにした。

５月１６日、料理の際に出たヨモギの煮汁に布をつけてみた。煮汁や布の様子を見た子どもたちは「ただ、しみてるだけ。ただの水じゃん」(K)「全然だめ」(H)「ずっとやってればつくかも」(A) と言い、１０分間程つけてみたが、色はほとんどつかなかった。Dが本に葉っぱで染めるやり方が載っていたことを思い出し、その場で本を広げ調べた。そして、採ってきたヨモギを追加して煮てみることにした。本には『８分間液につけておく』と書かれていたため、Dは何度もみんなに「つけておくんだよ」伝えた。しかし、Jは何度も出したりつけたりして、布の染まり具合をその都度確認した。Lは、「茹でたヨモギを布においてしぼったらどう」と言ってムスカリの時のように布の中にヨモギを入れて絞った。H は、茹でたヨモギを絞って鍋に絞り汁を入れた。しかしどの方法でも、布を染めることができなかった。Jは『最初なべに入れて、こいと思ったけど、布をつけてみたら、思ったより色がうすかった。次の日になったら、ちゃんと色がつくのかな…って思った』とふりかえりに書いた。

５月半ば、今まで子どもたちが作った色水が腐った状態でたくさん窓辺に並んでいた。教師が「みんな、この色水どうしようか」と聞くと、M は「片付けたかったんだけど、やりたいことがあってできなかった」と言った。他の子たちも頷いたり「そうなんだよ」とつぶやいたりした。ただ、このままにはしたくないということで、みんなで窓辺に並んでいたコップを片付けた。それから、いつものように外に出て草花を採りに行く時、Nは「たたき染めもしてみたい」と言った。すると、Nと同じように、たたき染めを始める子が数名いた。その後、飾ってあったコップを片付けてからは、色水作りをする人が減り、子どもたちは、たたき染めと染めものをやるようになっていった。

５月２５日の朝、DとFとOが「こんなに採ってきた」と袋いっぱいのヒメジョオンを教師に見せに来た。そしてDは「今日はこれ染めるから、休み時間にはさみ使っていい」と聞いた。２時間目休みになると、３人はベランダでヒメジョオンを鍋に入りやすい大きさに切り続けた。そして染めものの時間になり、煮始めると子どもたちは「何かくさい」(K)「結構濃くなってきた」(D) と言った。そして、布をつけてみるとDは「色がつかない」と言い、再びコンロに火をつけて、今度は布ごと煮ることにした。しばらく煮続けた布を見たDは「さっきよりは濃いけど、あんま染まんない」と言った。それからDとFは煮た液を袋に入れて持ち帰った。

一方、Mは、袋いっぱいのツツジを持って教室に入ってきた。染めものを始める前、Mは「今日はツツジ染める」と意気込んだ。しかし、染め方や道具が分からなかったため、教師は染めものの本にあるツツジのページをコピーして渡した。それからMはボウルにツツジと酢と水を入れ、もみ始めた。M はツツジを袋いっぱい採ってきたが、袋の半分位しか入れなかった。教師が「どんなふうに染めたい」と聞くと、Mは「濃くしたい」と言った。すると前回の濃さを知っている B が「もっと(液を)濃くしよう」と言い、Mは少しずつツツジを足していった。二人で液の濃さを確かめ、汁に布を入れると、Mは「染まった」と大きな声をあげた。その声を聞いた周りの子が「染めさせて」と言いに来ると、Mは「いいよ」と笑顔で答えた。

次の日の朝、Dは「見て。Fちゃんのノート染まっちゃった」と大きな声で叫びながらFのノートを教師に見せた。引き出しの中で染色液がこぼれ、一晩引き出しの中のものがつかっていた。Fのノートは、昨日染めた布よりも濃い黄色に染まっていた。Dは、みんなにもノートを見せ、どうしたらもっと染まるか考えた。子どもたちからは「紙に染める」「ヒメジョオンの量を増やす」「布を一日液につけておく」「布をかえる」と考えが出た。しかし、それからDがヒメジョオンの染めものをすることはなかった。

それからDは、染めものの本に書いてあるサクラや紫キャベツ、校内に咲くアジサイなど、その日に染めたいものを煮ては、布を染めることを楽しんだ。

６月１３日、子どもたちは体験園で桑の木を見つけた。桑の実がたくさんなった桑の木を見て子どもたちは「これ、食べられる

の」と教師に聞いた。教師が「食べられるよ」と答えると、子どもたちは桑の実を手に取り、恐る恐る口へと運んだ。そして「おいしい」「酸っぱい」と感想を言った。Aは、袋いっぱいに入れた桑の実を食べながら「あのね、どういう実がおいしくて、どういう実がまずいか分かった。赤すぎるのはね、あんまりおいしくないんだよ」と言った。そして「舌見せて。A、こんなになっちゃった」とお互いの舌を見ながら笑い合った。一方、Dは枝を揺すって桑の実を落とし、下にいるNが傘を広げた。２人は「Nくんそこね。おれこっち」とフォーメーションを組み、取りこぼしがないように桑の実を集めた。大量に桑の実を集めるとDは「N君一緒に染めよう」と言った。そして周りで桑の実を食べている人たちがいてもDは食べなかった。

６月１４日、LとCが休み時間に「今日染めたいから、ミント採ってくる」と袋をもらいに来た。染めものを始めると、前回よりも早く鍋に水とミントが入っていた。L は「前、時間計り忘れたから書いてるの」と手にネームペンで鍋に火をかけた時刻を書いた。煮た液を見たLは「今日は濃くできた。途中で水入れなかったからかな」と言った。しかし、その液に布を入れたが、Lの求める濃さには染まらなかった。たたき染めをしていたPは、紙の上に一つ一つ花や葉を並べた。そして、木槌で細かく叩き、一つできると少し開いて場所を確認し、また叩くという作業を繰り返した。できあがったたたき染めの紙を教師に見せると、Pは「何の形だと思う。ハートだよ」と指さした。指された部分を見るとハートの形になっており、下のところにはペンペン草の葉や茎もはっきりと写っていた。

６月２１日、これからやってみたいことを出し合ったときに、Dが「いろんな色が出るまで染めものをやりたい。同じのでやっても、やり方が違うと濃くなったり、薄くなったりするから、楽しい。」と言うと、子どもたちは「そうだよね」「不思議だよね」とうなずいた。続けてDが「後、お花の形とかそういうのもつけられるからやってみたい」と言った。それから子どもたちはどんな模様がつけられるのか本で調べ、やってみたい人は次の時にやってみることになった。

７月３日、KはBと協力して桜の葉で染液を作った。布を入れる段階になると、生活科のファイルを持ってきて、模様のつけ方が載っているページを何度も見返しながら洗濯ばさみで模様をつけようとしていた。本にある通りに、布を蛇腹折りにして洗濯ばさみを交互にはさんでいた。隣でヒメジョオンの染めものをしていた子たちが、染まった布を広げて模様を確かめていた。「模様ついてない」「もっときつくすればよかったかな」と言う周囲の子たちの様子を見聞きしたKは、輪ゴムをきつく巻き直していた。染めものの本に書いてある通りに、染液に２０分間漬け、石灰水に漬けた布をゆっくりと広げた。するとKの布にはくっきりとした模様ができていた。模様を見たKは目を輝かせながら、「ついてる」とつぶやいた。Kの布を見た子どもたちは、「いいな」「模様がついてる」「どうやってやったの？」と代わる代わるKの元に集まっては、模様を見たり、Kにやり方を聞いたりした。

７月１２日、G は前日からフキの葉をとり、準備をした。初めて一人でやるためか、なかなか始められないでいるとDが「まずやってみればいいじゃん」と声をかけた。Gが葉をとって鍋に入れているのを見て再度来たDが葉のみとって鍋に入れ、自分のところへ戻っていった。葉っぱを入れ終わり、水を入れていたGの手が止まった。Dが通りかかり「どうしたの」と聞くと、Gが水の量で迷っていることを伝えた。Dが鍋の中のフキを掌で押さえるように手を入れ「後１杯くらい？」と言って去っていった。ベランダの扉をみんなが開けたり閉めたりするので、風が吹き火が消えてしまうことがあったが、自分で何度も調節し、風が吹いても火が消えない加減を見つけていた。途中、Pが「染めさせて」と来ると「あいよ」と言ってPの様子をうかがいながら作業をした。P が液に手をつけそうになると「それさわると多分熱いよ」と声をかけた。

たたき染めをしていたQは最初レイアウトを考えながら花を置いた。真ん中の少ないところには、後から花びらを足したり、隙間に緑色を足したりしていた。叩くときには、木槌の角をつかって細かく叩いていた。角で叩くとすぐに染まり具合が分かり、浮き出るのが分かった。色が出なくなると、ひっくり返して、柄の部分で叩いていた。

８　２学期の授業の様子と教師の振り返り

（１）色の変化に気づく子どもたち（夏休み明け）

夏休み明け、 A が「ムスカリの色が消えてきちゃった」と後ろのムスカリの布を見ながら言った。それを聞いた他の子たちも、「ツツジも白くなっちゃった」「ヒメジョオンの黄色はちょっと残ってるかも」と口々に言い始めた。教師が「高遠に草木染めをしている人がいるけれど」と言うと（※教材研究参照）「え、染めものしてるの？」「見たい」と興味がある様子だった。「遠いから話を聞くことはできるかも」と伝えると、「聞きたい」とみんなで聞きたいことを出し合った。子どもたちは「染めた色が消えない方法が知りたい」(B)「色を濃く染めるためにはどうしたらいいか」(C)「布に色がつかないのもあったから、色がつく方法を知りたい」(A)「今までやってみてあまり染まらなかったものを染められる方法はあるのか」(D)「色が濃く染まる草花は何か」(E)「染める時に模様をしっかり出したい」(F) と次々に聞きたいことを言った。

私は、最初、色が消えていってしまうことに対して、子どもたちは、そんなに気にしていないと思っていた。私が藤澤さんの話をすると、子どもたちは思ったよりも反応し、興味をもっていることを知った。子どもたちは、困っているけれど、どうしたらいいか分からないため、立ち止まっていたのではないだろうかと思った。

（２）調べ、試してみる子どもたち（８月３０日・９月１日）

９月３０日、子どもたちは藤澤さんが用意してくださったプリントを読んだ。しかし、プリントの中に書かれている媒染の意味が分からなかった。そこで、今まで読んでいた染めものの本をもう一度読み返すことにした。本を読んだ子どもたちは「I こにも書いてある」と本の中にある媒染という文字を見つけた。ただ、ほとんどの子どもたちは、下地と媒染が混同していた。そこで、次回の染めものは下地をした布で媒染を試してみることになった。

９月１日、藤澤さんが書いてくれた牛乳での下準備の仕方の紙を見ながら牛乳の液をつくった。「水は２L だから、これ２杯だよね」「何時までつけておけばいいんだっけ」とお互いに確認をしながら液をつくり、布を浸した。子どもたちは、下地の完成した布を自分のファイルの間にはさみ、「明日はこれ使おう」「どんな色になるかな」とつぶやいた。

牛乳下地をする作業のなかでも、「先生、媒染終わった」「媒染ってどうやればいいの？」と今やっている作業と媒染が混同している子が多かった。媒染も下地も理屈は分からなくていいので、実際に染めるなかで、下地をしたことによる変化や媒染をしたことによる変化を感じてほしいと思った。

（３）媒染を試してみる子どもたち（９月６日）

E が「アサガオには媒染って書いてないけどやってみてもいい？」と話に来た。アサガオでピンク色に染まった布を媒染液に入れるとだんだんと色が変わっていった。「青くなった」と E が言うとみんなが見に来た。しばらくつけておくと色が薄くなり、布が白くなってしまった。「もう一回やる」と E は再度アサガオでピンクの布をつくり、媒染液に入れた。青色に変わったところで布を出すと青色に染まった。 E の様子を見ていた他の子たちも自分たちで布の様子を見ながら媒染液につけたり、出したりした。D の布はグラデーションのようになり、C や G の布は、青地にピンクの色の模様になり、「D 君の布きれい」「どうやってやったら２色になったの」と周囲の子たちもそれぞれの布を見合った。

今回初めて媒染した。マリーゴールドは、みょうばん液につけるとすぐに色が変化し、子どもたちから声が上がった。媒染を実感し、興奮したことが伝わってきた。その様子を見て、他の子たちも媒染に興味をもったようだった。その一人が E である。私のなかには、アサガオを媒染するという発想はなかった。（本には媒染なしと書いてあったので）確かに、それだけ色が変われば自分の染めた布はどうなるのかと試したくなるのはごく自然のことだと思う。本に縛られずに発想し、試してみる子どもたちの柔軟性に驚かされた。そして、媒染液につけて色が消えたことで、だから本には媒染なしとかいてあったのか、と私は納得することで終わってしまったが、子どもたちは媒染液につけた途中の色を残そうと考えたことにさらに驚かされた。最初は、

（４）思いもよらない模様を楽しむ子どもたち（９月１３日）

前回の染めものを見た H と I は、「今日はマリーゴールドで模様をつけてみたい」と初めて自分で染液を作って染めものをした。他の子たちは、染液を煮ている間に模様をつけるが、２人は鍋にマリーゴールドと水を入れると火をつけずにすぐにビー玉や輪ゴムのところへ行き、模様をつけ始めた。黄色に赤色の模様の入ったマリーゴールドの染液は赤色っぽい色になった。「何色に染まるかな？」「赤色じゃない？」「あ、花から赤い色がなくなった」と二人で楽しそうに話しながら鍋の様子を見た。模様をつけた布をゆっくり入れると朱色のような色になっていった。「やっぱりオレンジだね」と布全体に液がつくように菜箸で何度もひっくり返しながら話をした。媒染液に入れると、「黄色になった」とその変化に驚いていた。輪ゴムを取ると、I は「ねえ、見て見て。模様ついた。やった。成功だ。」と笑顔で教師に布を見せた。H は「見て。ここのところがうまくいった」とビー玉をとめたときの布の不規則な染まり具合の箇所を指さし、教師に伝えた。

H は今までたたき染めにひたすら取り組んできた。「ここにこれを置いたらこうなりそう」というように本人の中で予想をしながら丁寧に取り組み、模様作りを楽しんでいた。今まで染めものをしていた人たちは色が薄く、模様がうまく出なかったが、前回マリーゴールドの染めものをした子たちの布ははっきりと模様が出ていた。H はその布を見たことで、染めものでの模様にも興味をもったようだ。鍋に火をかける前に模様を作ろうとし始めたのも、模様への関心の表れであると感じた。H は模様ができたことにも喜んでいたが、自分の模様のなかでも偶然できた膨らみのようなところを指して、「ここのところがうまくいった」と言った。H の中でビー玉のきれいな輪の形ができることよりも、自分が思ってもいなかった偶然の形ができたことの

（５）試行錯誤していく子どもたちとその場で楽しさを見つけ活動していく子どもたち（９月２０日）

A と B はツユクサで染めるために袋いっぱいのツユクサを採ってきた。まず、なるべく花が多くなるように余分な茎と花を分けた。花と酢を入れもみ始めると、「見て、青くなった」「きれい」と口々に感じたことを話し、熱中して揉み続けた。しばらくすると「ずっともんでたら、茶色くなってきちゃった」と笑いながら教師に話しに来た。「どんな色に染まるかな」と教師と話をし、手を洗いに行くと、今度は、洗っていた石けんが最初にもんでいた青に近い色になり、歓声があがった。「先生、紙ちょうだい。この石けんで紙染めてみる」と紙に熱心に石けんをつけ始めた。その後、酢を入れた染液に布をつけ、染めた。「見て、染まった。」「やっぱり茶色になっちゃった。もみすぎたんだよ。」と、布を見せた。「次もツユクサでやってみる。もむの途中でやめたら、青くなるかも」と再度ツユクサを試してみることを決めた。

J、K、L はここのところ２回続けてたたき染めの後、色水をしたり、ドングリ拾いをしたりしていた。そのドングリどうするのと聞くと、黙ってしまった。M はずっと外におり、笹をとったり、時々色水をしたりして過ごしていた。

本に載っていなくても、身の回りの自然から自分のやってみたい植物や出してみたい色を見つけ、考え何度も挑戦する子が増えてきた。出したい色や模様はその子によって違うので、こちらから見て渋くていい色だなと思っても子どもたちは納得していないことがある。どうしたら自分が思った色が出せるのか、思考し、試していく姿はすごいと思う。染めものは、多くの子たちにははまったが、一方で、色水遊びへと戻ってしまった子たちもいる。J、K、L、M は今までの染めものでも自分でするというよりは、友だちが染液を作るのを見ていることが多かった。また J はよく分からずに水を足してしまい、周囲の子に注意されている姿もあった。自分でもやりたいが、やり方が分からなかったり、やりたいことがあるのに、他の子たちにとられてしまったりして、あまりいいイメージがないのではないかと思う。その点、たたき染めや色水遊びは、自分がやりたいことを最初から最後まで自分でできるし、やる工程が染めものほど多くはないので、友だちにやり方を確認する必要もない。毎回自分のやりたいことをしてきたので、１回１回の活動の経験をつなぎ合わせ試行錯誤していく子と、その場で楽しさを見つけ活動していく子がいる。全てを自分でできる点では後者の子たちにとっても意味はあると思うが、染めものの楽しさを感じる活動にするには、どうしたらよいだろうか。やり方が分からなくて困っているのならば、次回は一緒に活動をしてみないか誘ってみようと思う。その時のこの子たちの感じたことを一緒に感じとってみたい。

（6）桜の葉を染めてみた子どもたち（9月２９日）

J、K、L、M、N は桜の葉で染めることにした。L は少し暗い表情だった。「全部入れられなかった」と自分の採ってきた葉っぱを残念そうに見ていた。まだ大きい鍋残っているからそっちにしたらと提案すると笑顔で鍋を持ってきて勢いよく自分の葉っぱも入れた。M は最初からやり方の紙を取り出し、一生懸命一文字、一文字、ゆっくり声に出して読んでいた。水の量はどれくらいだったか聞くと「分からない」と答えた。他の子たちも困っていたが、『布が泳ぐくらい』と書いてあったので、そこでまた迷い始めた。K「あんまり入れると薄くなっちゃう」J は１L マスを持ってきて「これ１杯入れよう」と少しずつ水を足していった。桜の葉よりも水の方が少なかったので、この水の量でここにいる全員分染まるかと尋ねると、「もう１杯だけ入れよう」と言って水を足し、量が決まった。L と N は菜箸で葉をつつき始めた。J はぶすっとした表情で顔を背けている。どうしたのか聞くと J「みんなが話を聞いてくれない」J もやりたかったってことかなと聞くと頷くので、自分でやらせて欲しいと伝えることを提案した。他の子たちに呼ばれその場を離れた。しばらくして戻ってくると、それぞれが菜箸を１本ずつ持ち、時に交代しながら鍋の中をのぞき込んでいた。M は「先生、布入れたら、外に行って材料を採ってきて、たたき染めしていい」と言ってきた。教師が「いいんじゃないかな」と答えると頷いた。しかし、布を入れた後も M はその場から離れることなく、みんなと一緒にタイマーを見たり、鍋の中の布を見たりしていた。媒染液に漬け、取り出すと、M は「血みたいに赤い」と笑いながら見せに来た。J は「見て、きれい」と目を輝かせた。L は「一緒にやったのに J のはピンクで何で私のは赤いの」と見せに来た。下地は何でやったか聞くと豆乳だったので、J は牛乳だよと伝え、次、もう一回今度は牛乳でやってみるか聞くと、笑顔で頷いた。

J の様子を見ると、やはり、自分の思うようにやってみたい気持ちが強かったように思う。私が離れている間に何があったか分からないが、明らかに雰囲気が変わっていた。この日の即席メンバーだが、普段リードをとって進めていく人がいなかったのもよかったと思う。J、K、M は今まで説明などはあまり見ずに、やっていたが、今回は率先して染め方の紙（染めものの本をコピーしたもの）を読んでいた。特に M は、作業が変わるごとに「M が読む」と何度も読み返していた。以前 M と N で染めた時には、M は染めている時間が待てずに、布を入れた後１分もしないうちに布を取り出し、外へ行ってしまった。今回も待てないだろうと思ったので、たたき染めをしたいという M の提案はいいなと思ったのだが、外へ行くことなく、染めている時間をその場で待てた。以前やったときよりも、染めものに対する M の思いが強かったのだろうか。一つ一つの工程を確かめながらやっていた。友だちから「これやるよ」と提案されるより、自分のこととしてこの日の染めものを受け取れたのかもしれない。そして、染め上がった布をそれぞれの子が嬉しそうに掲げたり、友だちに見せに行ったりしている姿を見て、きっとこの子たちも染めものの楽しさを感じたのだろうと思い、私も嬉しい気持ちになった。

８　本時に寄せる教師の願い

現在、子どもたちの活動は大きく２つに分かれている。１つ目はたたき染めである。子どもたちは、材料を探しに行くこと、自分の採ってきた草花の組み合わせや、毎回違う模様になるところを楽しんでいる。本時では季節の変化や今の季節に採れる草花を楽しみ、自分の作った以前のものと比べたり、友だちの作品を見たりするなかで、紙に写った草花の色の重なりや模様の美しさなど、たたき染めの楽しさを感じてほしい。

２つ目は染めものである。藤澤さんから教えていただき、下地や媒染をやるようになったことで、色の発色がよくなり、色も消えにくくなった。秋ならではの新たな植物を染めてみる様子や、以前染まらなかったミントにも再挑戦する様子もあった。また、色が濃く染まるようになったことで、以前よりも模様がはっきりと出るようになり、模様を楽しむ姿が増えた。子どもたちは染めてみたいものがたくさんある。例えば、桜の葉で染める子たちは、まずその匂いに気づくだろう。煮ていくなかで、色がどんどんと濃く変化していくことにも注目するだろう。そういった五感で感じる変化を自分でも実感し、一緒に活動している友だちとも共有してほしい。石灰液から出す時には、媒染前と後の色の違いや豆乳下地と牛乳下地による違いも、自分の作品と友だちの作品を見比べるなかで感じてほしい。柿など本には載っていない思いもよらないものに興味をもっている子もいる。やり方が載っていないので、まず柿のどこを使うのか（葉、実、枝）、どんなやり方でやるのか、自分で思考する姿が楽しみである。色もさることながら、模様を楽しんでいる子も多い。最初はビー玉ならビー玉だけでやっていた子どもたちが、友だちの作品を見て、３種類など道具を組み合わせるようになってきた。組み合わせたときにできる思いもよらない形を楽しむと共に、「どうやってやったの」と友だちの作品にも興味をもっている。うまくいかないこともあるが、その時には、立ち止まり振り返り、次回に生かせるように考えていくだろう。本時は、自分で今までの経験を生かしながら試行錯誤したり、友だちと関わったりしながら染めものを楽しんでほしい。

９　本時案

（１）　本時のめあて

色を濃くしたり、色を消えにくくしたりするやり方に触れた子どもたちが、秋の自然に親しみ、自分の見つけた草花や実からどんな色や模様が表れるのか楽しみながら活動する。

（２）本時の位置　全１６時間中第１２・１３時

前時　秋の草花や実を探しに行き、見つけた草花や実でたたき染めをしたり、下地をつけた布で染めものをしたりして、それぞれの子がつくった色や模様を楽しんだ。

次時　できたものを見せ合い、これまでの体験で楽しかったことや気づいたことや分かったこと、難しかったことなどを伝え合う。

（３）子どもたちの活動予想図※別紙（前時のもの：本時は当日配布します）

（４）本時子どもを見る視点

子どもたちは、染めものやたたき染めにひたり、楽しんでいたか。それは、どのような姿や言葉に表れていたか。

資料　教材研究

子どもたちは染めることを楽しんでいたが、本では色がしっかりと出ているのに、色がつかないことについて、子どもたちも困り感はあるのだが、解決するための方法があるということに気づけずにいた。そのため、教師もしっかり染めるための方法や、色が濃くなって長もちするための方法があることに、子どもたちの目を向けさせたり、気づかせたりするにはどうしたらよいのか悩んでいた。染めものの本は５月から彼らなりに見ているのだが、下地や媒染のページに目を向ける人は誰もいなかった。染めものをやっている人の本物の作品に触れ、こんなに濃く染まるんだ、こんな風に染めたい、どうしたらこんな風に染まるのか知りたいという思いをもち、やり方を知ることができれば、今やっている活動がもっと楽しめると考え、専門家を探した。

地元の方をと思って探したが、なかなか見つからなかった。伊那紬では、自社で染めを行っており、染材に科学染料だけでなく、地元でとれるＥ木や植物を使用し、昔ながらの手染めの方法と技術で染めていることを知り、見せてもらいに行った。染材が保管されている棚を見せていただくと、桜やリンゴ、白樺など様々な木の皮が並べられていて、今まで子どもたちと一緒にその場でとってきて染めていた私としては、こんな風にして乾燥させて保管すれば、いつでも染めものができること、木の皮や矢車玉のような実でこんなにも色がでるのかという驚きがあった。また、同じ染液を使っても媒染する金属によって色がかわり、実際に染めた色鮮やかな糸を見せてもらえたこともわくわくした。ここで見学させてもらっても、子どもたちの感動はあると思ったが、染める際は機械を使っていること、染めるのは布ではなく糸であり、それも絹のため下地が必要ないことなどから子どもたちとは条件が違うため、見学に行かせてもらうべきか迷っていた。

校内の先生から、以前高遠の藤澤さんに染めものでお世話になったことを教えていただき、お話しをお聞きした。実際に藤澤さんの染めた布を見せてもらい、その模様の美しさや色の美しさに感動し、子どもたちにもこの作品を見せてあげたいと思った。以前子どもたちに配った資料も持ってきてくださり、牛乳で下地をする方法や媒染についてまとめてくださり、説明もしてくださった。藤澤さんの作品は子どもたちに触れさせたいが、説明が専門的すぎて、今の子どもたちには会ってお話しをお聞きするのは少し早いと感じたため、私が藤澤さんからお聞きしたことをかみ砕いて子どもたちに伝え、作品をお借りすることにした。

本には豆乳の下地のやり方が載っていたため、私は自分が教材研究をする際には豆乳で行っていた。藤澤さんから牛乳の下地のやり方をお聞きし、その違いを調べてみた。私の主観です。

	牛乳	豆乳
量	水２Ｌに、牛乳２０ｍＬのため、牛乳の量はとても少なくてすむ	薄めずに使うため、たくさん必要
乾いた時の布の感じ	柔らかい 日に十分当てて干すと匂いは和らぐ	硬く、ごわごわしている 豆乳の匂い
染めた時の様子	発色が柔らかい 色の薄いものは染まりにくいかも	はっきりとした色合い 牛乳であまり色がでなかったものでも牛乳よりは少し濃く出る

個人的には色合いは牛乳の柔らかい色の発色の方が好きだと感じた。どちらの下地がいいのか分からないが、子どもたちは色の違いをどう感じるか楽しみに思った。